

長崎県埋蔵文化財センター 研究紀要 第 14 号

竹松遺跡の片刃石庖丁について

宮崎 貴夫

釜山老圃洞遺跡出土「脚付三連壺」の意義

申 東昭・白石 溪呀



長崎県埋蔵文化財センター

2024 年 3 月

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要
第 14 号

序

長崎県埋蔵文化財センターでは、センター職員及び県内埋蔵文化財関係者の研究活動の一端を発表する場の提供を目的として、平成22年の開所以来毎年度、研究紀要を刊行しています。

この14号では、当センターが友好機関協定を締結し学術交流を行っている韓国釜山博物館との共同研究として行った脚付三連壺の研究成果や、大村市竹松遺跡から出土した片刃石庖丁に関する報告を掲載しています。

長崎県埋蔵文化財センターは、これからも「研究し、広く世に発表する」ということを通して、専門的知識・技術の向上を図りながら、調査研究機能の充実と長崎県の埋蔵文化財保護行政の中核機関としての責務の遂行に取り組んでいきたいと考えています。

皆様の御指導、御叱正をお願いいたします。

令和6年3月

長崎県埋蔵文化財センター
所長 寺田 正剛

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要第 14 号
目 次

竹松遺跡の片刃石庖丁について	1
宮崎 貴夫	
釜山老圃洞遺跡出土「脚付三連壺」の意義	21
申 東昭・白石 溪呀	

例 言

- 1 本書は、長崎県埋蔵文化財センター職員及び県内埋蔵文化財関係者の研究活動の一端を示すことを目的として発刊されたものです。
- 2 掲載されている論文等の内容や意見は、執筆者個人に属し、長崎県教育委員会あるいは長崎県埋蔵文化財センターの公式見解を示すものではありません。
- 3 この研究紀要は、長崎県埋蔵文化財センターホームページ (<http://www.nagasaki-maibun.jp/>) で、PDF 形式でダウンロードできます。

竹松遺跡の片刃石庖丁について

宮崎 貴夫

1. はじめに

長崎県本土地域における弥生時代の磨製石庖丁（磨製石庖丁は以下、石庖丁）については、2019年に「長崎県本土地域の磨製石庖丁―片刃石庖丁を中心として―」『埋蔵文化財センター研究紀要』第9号にまとめた（宮崎2019a）。しかし大村市竹松遺跡については、西九州新幹線関係などに伴う調査報告書が刊行途中であり、この論稿で取り上げた石庖丁は4点に留まっていた。2020年3月に竹松遺跡の調査報告書の刊行が終了したので、この小論ではあらためて竹松遺跡出土の石庖丁の資料を取り上げ、あわせて長崎県本土地域の片刃石庖丁の状況・様相について再検討を行いたい。

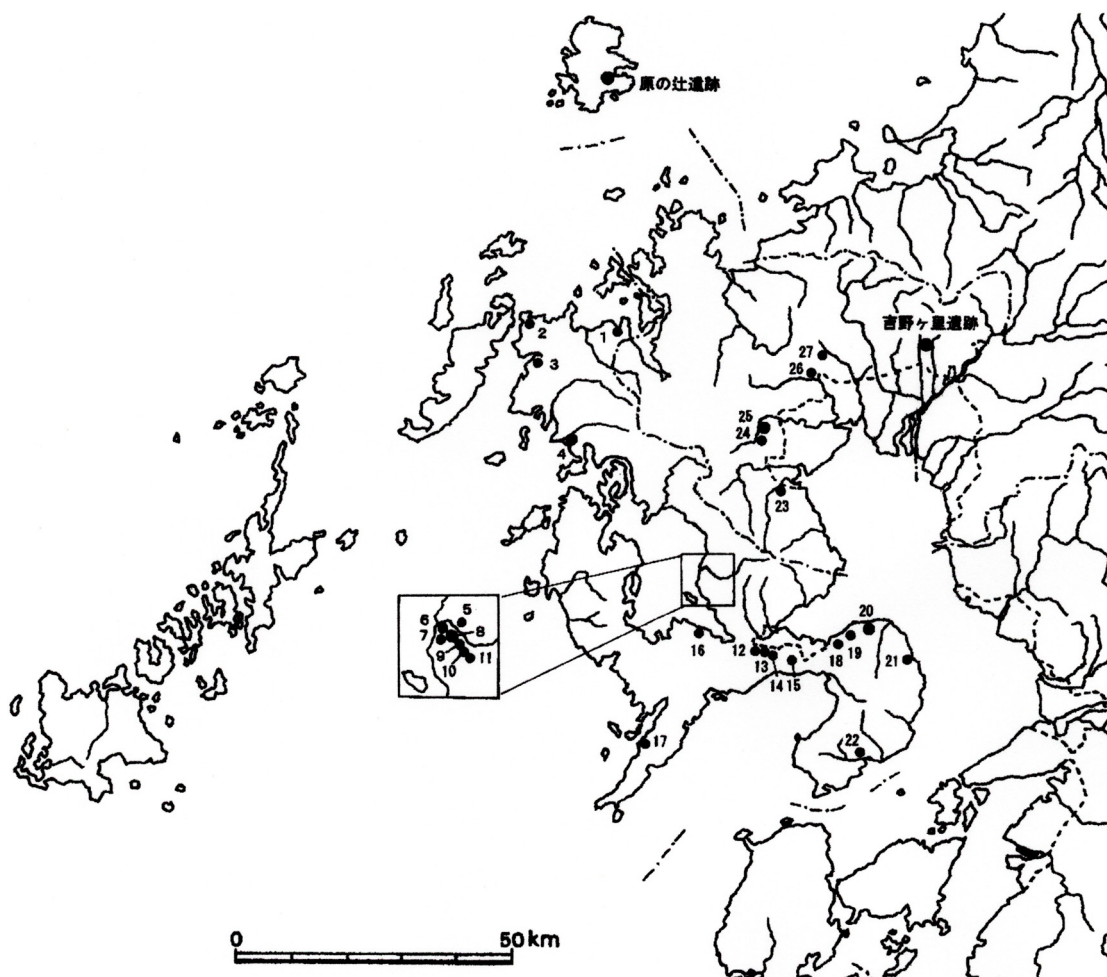


図1 片刃石庖丁出土遺跡 1今福、2里田原、3大野台、4門前、5稗田、6黒丸、7富の原、8竹松、9川端、10立小路、11小路口、12小野扇町、13小野宗方、14小野曾屋、15西ノ角、16伊木力、17深堀、18伊古、19陣ノ内、20佃、21畑中、22今福、23則重、24みやこ、25茂手、26天神軒、27寺浦廃寺

表1 長崎県本土地域出土の片刃石庖丁出土一覧表

出土遺跡	所在地	遺構・層位ほか	時 期	番号	型態他	石 材	文献
1 今福	松浦市		弥生前期～後期	1 不明		玄武岩	1
				2 C		玄武岩	
2 里田原	平戸市		弥生早期～後期	3 C		安山岩?	2
				4 D		シルト岩	3
3 大野台	佐世保市		弥生後期	5 G		安山岩	4
4 門前	佐世保市	溝SX-6	弥生後期前葉	6 F		安山岩	5
		弥生後期河川跡	弥生後期前葉～後葉	7 F		安山岩	
				8 F		安山岩	
				9 F		砂岩	
				10 不明		安山岩	
				11 D		玄武岩	
				12 未製品		安山岩	
		河道SR9-1	弥生中期～古墳前葉	13 B?		安山岩	6
		河道SR9-2	弥生後期初～後葉	14 B		安山岩	
				15 C		安山岩	
5 穂田	大村市	住居跡4軒重複	古墳前期後葉?	16 不明		安山岩	7
6 黒丸	大村市		弥生中期～後期	17 不明		記載なし	8
		表面採集		18 G		記載なし	9
7 富の原	大村市		弥生中期～後期	19 B		記載なし	10
		表土層		20 C		玄武岩	11
本 書							
8 竹松	大村市		弥生後期～古墳前期	21 不明		泥岩	12
9 川端	大村市	B区SD1 B区3b層		22 G		泥岩	
10 立小路	大村市			23 B		安山岩	13
11 小路口	大村市	自然流路	弥生中期末～後期	24 不明		硬質砂岩	14
12 小野扇町	諫早市		弥生中期～後期	25 C		安山岩	15
13 小野宗方	諫早市		弥生前期～中期	26 F		硬質粘板岩	16
14 小野曾屋	諫早市	5層	古墳前期後葉	27 C		輝石安山岩	17
15 西ノ角	諫早市	住居跡	弥生後期後葉(新)	28 C		安山岩	18
			弥生中期～古墳初	29 不明		安山岩	
				30 不明		安山岩	
16 伊木力	諫早市		弥生前期～後期	31 不明		粘板岩	19
17 深堀	長崎市		弥生早期～後期	32 C		記載なし	20
18 伊古	雲仙市		弥生中期～後期	33 G		安山岩	21
				34 E		角閃石安山岩	
19 陣ノ内	雲仙市		弥生中期～後期	35 E		記載なし	22
				36 E		記載なし	
				37 F		記載なし	
				38 E?		記載なし	
				39 B?		安山岩	
20 佃	雲仙市	旧河道II層	弥生中期後葉～後期	40 G		角閃石安山岩	23
		"		41 不明		安山岩系	24
		旧河道III層		42 C		角閃石安山岩	
		" III層		43 不明		角閃石安山岩	
		" III層		44 不明		角閃石安山岩	
		" III層		45 不明		砂岩質	
		" III層		46 未製品		角閃石安山岩	
		" III層		47 未製品		角閃石安山岩	
		" III層		48 未製品		砂岩系	
		" III層		49 未製品		角閃石安山岩	
		旧河道IIIc層		50 F		安山岩系	
		旧河道V層		51 E		角閃石安山岩	
		" V層		52 F		角閃石安山岩	
		" V層		53 F		安山岩系	
		" V層		54 F		角閃石安山岩	
		" V層		55 B		安山岩系	
		" V層		56 B?		安山岩系	
		" V層		57 G		安山岩系	
		" V層		58 E		堆積岩系	
		" V層		59 F		堆積岩系	
		" V層		60 E		堆積岩系	
		" V層		61 F		堆積岩系	
		87区SB1	弥生後期後葉(古)	62 B		堆積岩系	
		86-2区SB1	古墳前期前葉	63 未製品		角閃石安山岩	
		32区SK1	古墳初頭	64 B		安山岩系	
		84区SD1		65 未製品		角閃石安山岩	
		4号集積		66 B		堆積岩系	
		25区		67 E		角閃石安山岩	
		84区		68 不明		堆積岩系	
21 畑中	島原市	Gr3II層	縄文～中世	69 B		安山岩	25
22 今福	南島原市	B区1号溝	弥生中期後葉～後期後葉	70 不明		粘板岩	26



図2 竹松遺跡位置図（川端・堀内 2016 より引用・調査範囲が新幹線関係調査区域）

63 稗田、94・95 黒丸、102 富の原、96 竹松、99 川端、100 立小路、104 小路口

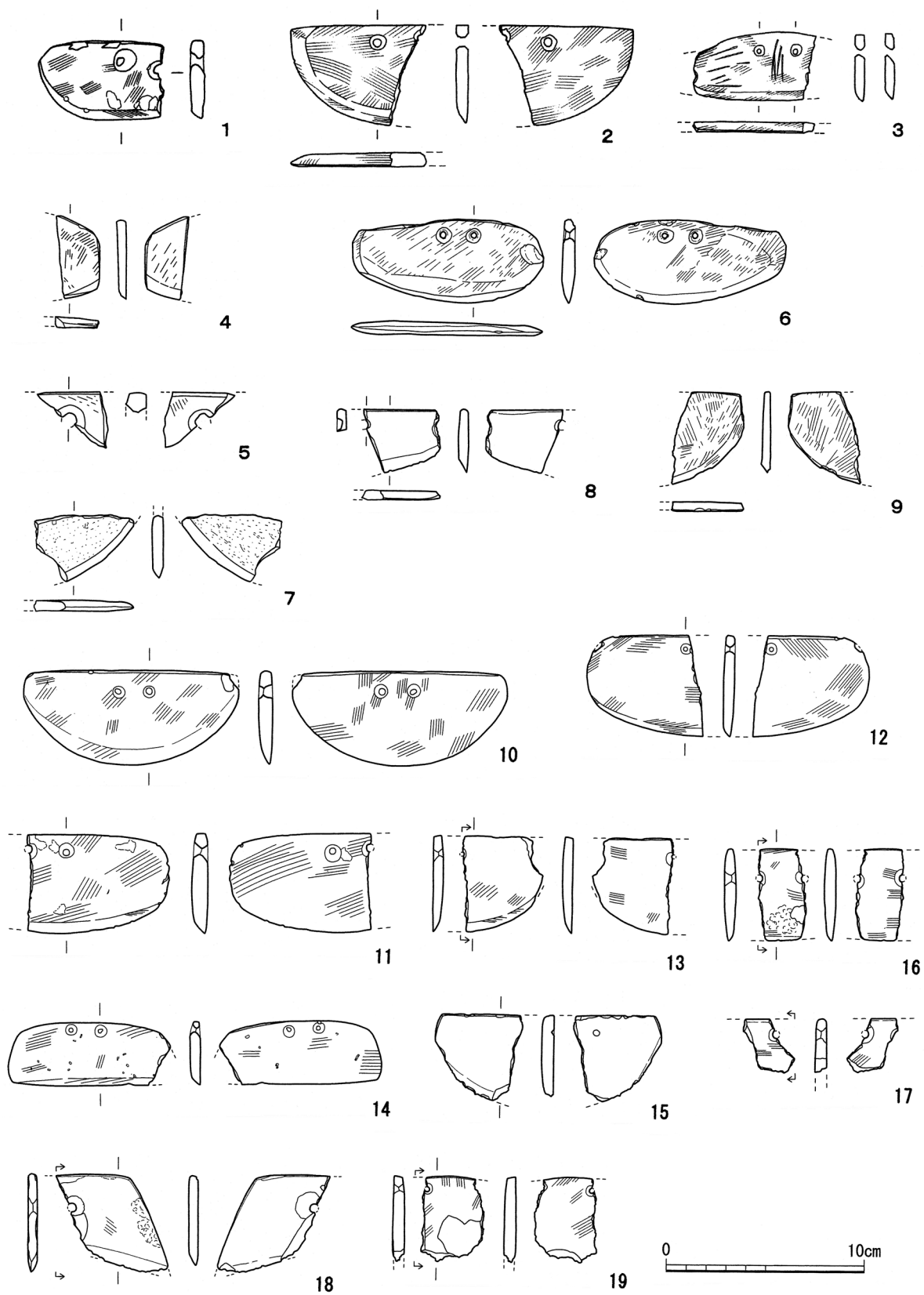


图3 竹松遺跡出土石庖丁1 (1/3)

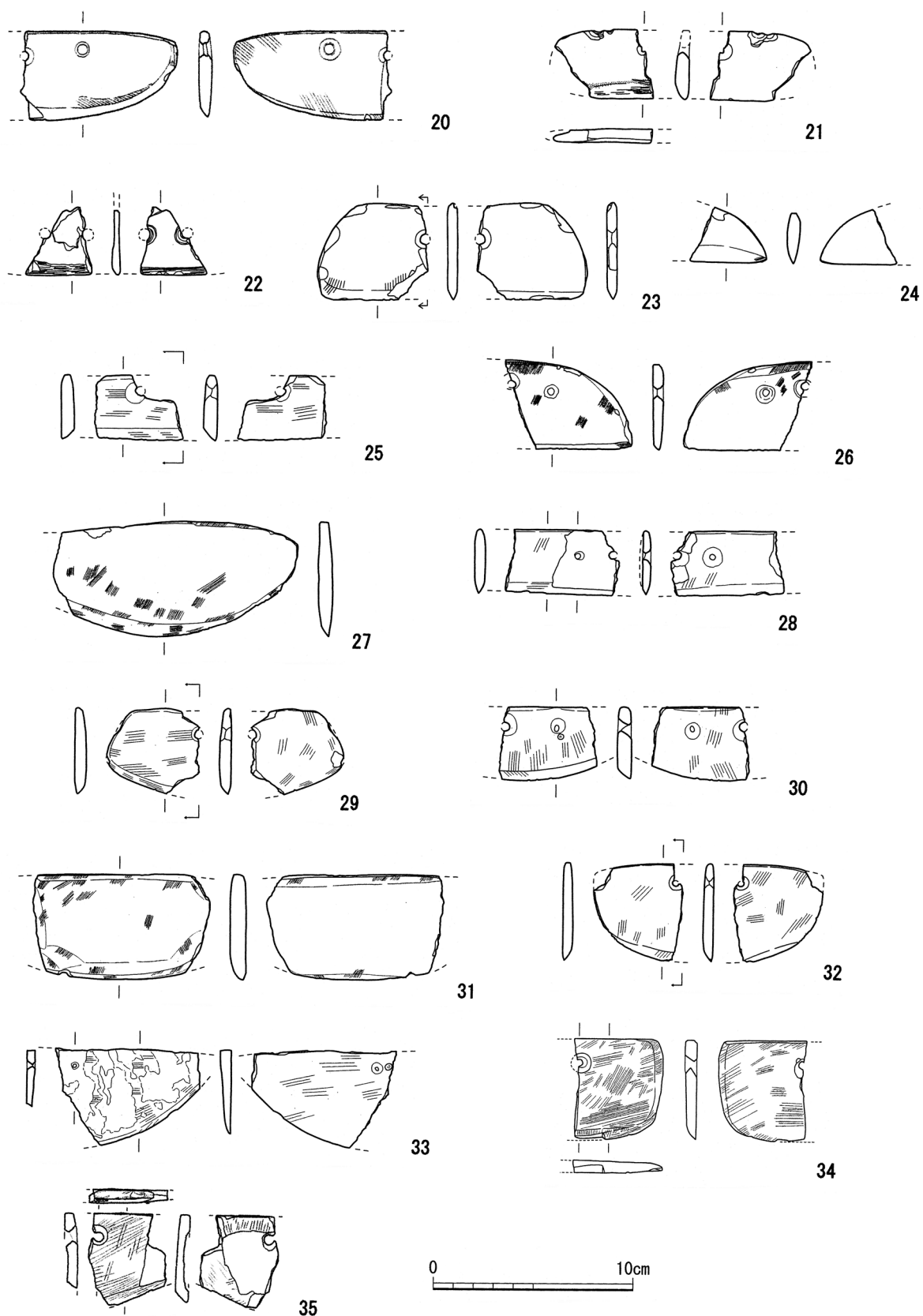


图4 竹松遺跡出土石庖丁2 (1/3)

2. 竹松遺跡出土の石庖丁

竹松遺跡が所在する大村市は、長崎県本土部に中央に位置し、県内最大の大村扇状地を擁する。大村扇状地の北端に沿って流れる郡川は、黒丸遺跡がある沖田付近で「鍵」の字形に折れ、内湾の大村湾に注いでいる。竹松遺跡は、大村市竹松町に所在し、郡川が屈折する北端部付近の標高 10 ～ 15 m の扇状地に立地する。遺跡は、縄文時代～古代・中世にかけ継続する複合遺跡で、西九州新幹線の路線や車両基地の建設に伴う調査（110,000 平方メートルに及ぶ）と都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴って広大な区域の発掘調査が実施され、縄文時代～中世に及ぶ住居跡・建物跡・墳墓・古墳・区画溝など、さまざまな遺物・遺構が出土している。その発掘調査の成果によって、長崎県本土部の考古学研究を行っていく上で、欠かすことができない標式遺跡となっている。

ここでは、竹松遺跡で出土した石庖丁について検討を行いたい。石庖丁は、竹松遺跡から 35 点出土している（表 2）。石庖丁の刃部形態は、32 点が片刃で、不明が 2 点あるが、不明を含めて片刃石庖丁の可能性が高い。

表 2 竹松遺跡出土石庖丁一覧表

番号	遺構・層位ほか	時 期	形態ほか	刃部形態			石 材	文 献
				両刃	片刃	不明		
1	201202調査区包含層	弥生後期前葉～末	F		◎		ディサイト	25
2	201208調査区包含層	弥生後期後葉～古墳初頭	B		◎		安山岩	
3			G		◎		安山岩	
4	201303A5区SC1	弥生後期前葉（古）	F		◎		安山岩	26
5	201303B1区SC124	弥生後期前葉（新）	不明			◎	安山岩	
6	201202区包含層 3 層	弥生時代後期	C		◎		安山岩	
7			B ?		◎		泥岩	
8			F ?		◎		安山岩	
9			B		◎		安山岩	
10	201406－2区SX3	弥生後期前葉	C		◎		安山岩？	27
11	201404調査区包含層	弥生後期末～古墳初頭	F		◎		安山岩	
12			F		◎		安山岩	
13			F ?		◎		安山岩	
14			G		◎		安山岩	
15	201405調査区包含層	弥生後期前葉～古墳初頭	C		◎		ディサイト	
16			不明		◎		ディサイト	
17			不明			◎	安山岩	
18			石鎌転用		◎		凝灰岩	
19			F			◎	安山岩	
20	201406調査区包含層	弥生中期後葉～後期	C		◎		安山岩？	
21	201407調査区包含層	弥生後期前葉	G		◎		安山岩	
22			不明		◎		安山岩	
23			G		◎		安山岩	
24	201501－1・2区SD6	弥生時代後期前葉	G		◎		結晶片岩	28
25	201501調査区包含層	弥生後期初頭～古墳前期	不明		◎		サヌカイト	
26			G		◎		サヌカイト	
27			未製品？		◎		サヌカイト	
28	201506調査区包含層	弥生中期中葉～古墳前期	不明		◎		サヌカイト	
29			F		◎		サヌカイト	
30			不明		◎		安山岩	
31			未製品？		◎		サヌカイト	
32			F		◎		安山岩	
33			B		◎		サヌカイト	
34	SD05溝	弥生後期前葉	F		◎		安山岩	29
35	B区SC1	弥生後期前葉（新）	F		◎		安山岩	30

図3の18は、斜めになった刃の形状から、もともと磨製石鎌であったものを石庖丁に転用するため孔を穿孔して、刃部を片刃に研ぎ直した可能性をもっている。石鎌として見れば、原の辻遺跡における中尾篤志氏の石鎌分類（中尾 2005）のA類（背面と基部側面の角度が鈍角となるもの）であり、報告書では凝灰岩とされているが、原の辻遺跡で製作されていた堇青石ホルンフェルスの可能性をもっている。18と未製品2点を除いた製品32点の石材は、安山岩20、サヌカイト7点、デイサイト3点、泥岩1点、結晶片岩1点となり、サヌカイトとデイサイトを安山岩系火成岩に含めれば30点、その他2点となり、安山岩系石材（93.8%）の割合が卓越していることになる。未製品2点の石材は、安山岩系のサヌカイトである。石庖丁の形態（図5）から32点の製品をみると、B型4点、C型4点、F型12点、G型6点、不明6点となり、F型がもっとも卓越している。

竹松遺跡から出土した片刃石庖丁は、弥生時代後期前葉から古墳時代前期にかけての遺物包含層出土が多いが、時期を押さえることができる遺構として堅穴住居跡（SC）があげられる（表2・3、図6）。

以下、片刃石庖丁が出土した堅穴住居跡出土土器をみてみたい。

図6上段の201303 A 5区SC 1出土土器は、「く」の字に外反する口縁の高三瀝式の北部九州系甕（1～3・5・8）、台付甕（4・5）、複合口縁壺（12・14）などが出土しており、時期的には後期Ⅱ期の弥生時代後期前葉古段階の資料である。9は古墳前期の小型器台であり混入品の可能性が高い。石庖丁（図3-4）は、片刃石庖丁で形態はF型、石材は安山岩製である。

図6下段のB区SC 1出土土器は、「く」字形に外反する甕（2）と、算盤形の胴部に重弧文を施す免田式壺（4）などが出土している。時期的には後期Ⅲ期の弥生時代後期前葉新段階の資料である。石庖丁（図4-35）は、片刃石庖丁で大半を欠損するが形態はF型であろう。石材は安山岩製である。図6中段の201303 B 1区SC 124出土土器は、内湾気味に外反する口縁の台付甕（1・2）を主体

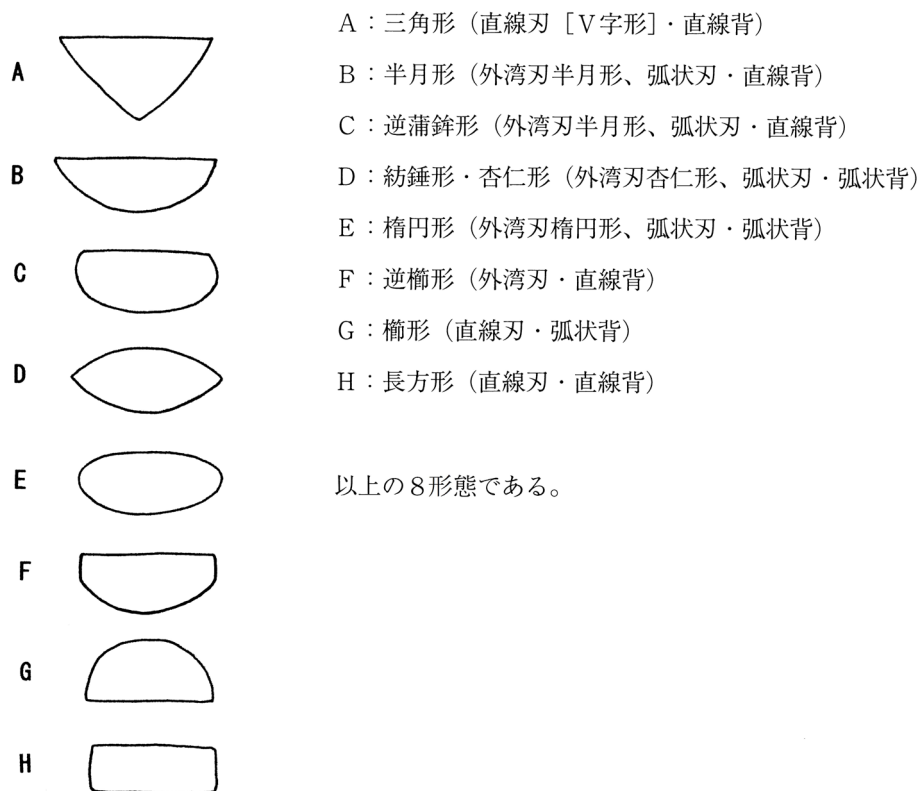
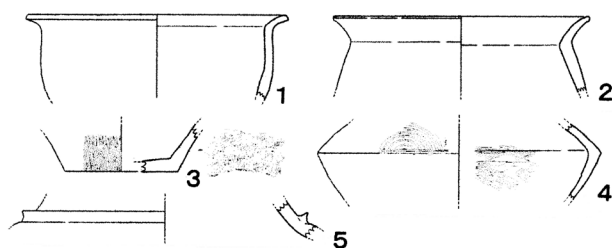
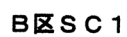


図5 石庖丁の形態模式図

201303A 5区SC 1



– 8 –

表3 竹松遺跡の弥生後期～古墳前期遺構の変遷案（ゴチは石庖丁出土遺構） 2023.3 現在

遺構 時期	住居跡（SC）	土坑（SK）・柱穴 （SP）	溝（SD）	墳墓（ST）	祭祀遺構・集積遺構 （SU）・他
弥 生 後 期	I 期	201407・1区SK10 201506・2区SK9		201407・1区ST1 201506・3区ST3	201202・2区祭祀遺構2
	II 期	201303・A5区SC1 201303・B1区SC123 201407・1区SC6 201407・1区SC7 201407・1区SC8 201407・2区SC19 SC1(214集) B区SC2(217集)	201407・1区SK11	201405・3区ST6 201405・3区ST9 201405・5区ST1 201405・5区ST8 201406・2区ST1 201406・2区ST2 201506・2区ST1 201506・3区ST2 201501・4区ST1	201202・2区祭祀遺構2 201406・2区畦畔2
	III 期	201406・3区SC11 201302・4区SX5 B区SC1(217集)		201303B1区ST1 201303・11区ST38 201405・3区ST3 201405・3区ST7 201407・2区ST4	201202・2区祭祀遺構2 201302・1区祭祀遺構1
	IV 期	201303・B1区SC124 201407・4区SC13 201506・2区SC15		201302・1区ST35 201302・1区ST36	201202・2区祭祀遺構2
	V 期	201407・4区SC12		201302・2区ST37	201202・2区祭祀遺構2
	VI 期	201303・3区SC3 201404・B6東区SC4		(201302・1区墓 域)	201202・2区祭祀遺構2
	VII 期	201403・3区SC1	201303A1区SK8 201404B8北区SP1081		
	I 期		201407・1区SK9	201208・4区北SD1 202403・3区SZ1 周溝／円墳	
古 墳 前 期	II 期				201405・2区SU6 201405・2区SU8 201405・4区SU13 201405・4区SU14
	III 期				201405・1区SU1 201405・2区SU7 201405・5区SU12
	IV 期	201407・2区SC15 201407・2区SC162 201405・2区SC1 201405・4区SC16			201405・2区SU9 201405・3区SU10

3. 竹松遺跡の遺構変遷について

竹松遺跡では、弥生時代～古墳時代にかけて数多くの遺構が出土している。そのなかで、弥生後期から古墳前期にかけての遺構の変遷を捉えたのが表3である。土器編年については、佐賀平野の蒲原宏行氏の編年（蒲原 2019）と久住猛雄氏の編年（久住 1999・久住ほか 2017）を基準として変遷案を組み立てた。その詳細は、ここでは紙数に限りがあるので、別途発表する機会を持ちたい。

時期区分は、弥生後期はⅠ期からⅦ期に区分して、Ⅰ期（後期初頭）、Ⅱ期（後期前葉古段階）、Ⅲ期（後期前葉新段階）、Ⅳ期（後期後葉古段階）、Ⅴ期（後期後葉新段階）、Ⅵ期（後期末古段階）、Ⅶ期（後期末新段階）に分けている。なおⅢ期については、前の論稿（宮崎 2022 a、2022 b）では、「中頃」としているが、時期区分としては曖昧な表現であるため、「後期前葉新段階」と改めたい。Ⅰ期からⅤ期は、それぞれ蒲原編年の村徳永2式、村徳永3式、千住1式、千住2式、惣座0式に対応する。Ⅵ期は蒲原編年の惣座1式と久住編年のⅠA期、Ⅶ期は蒲原編年の惣座2式と久住編年のⅠB期に対応する。

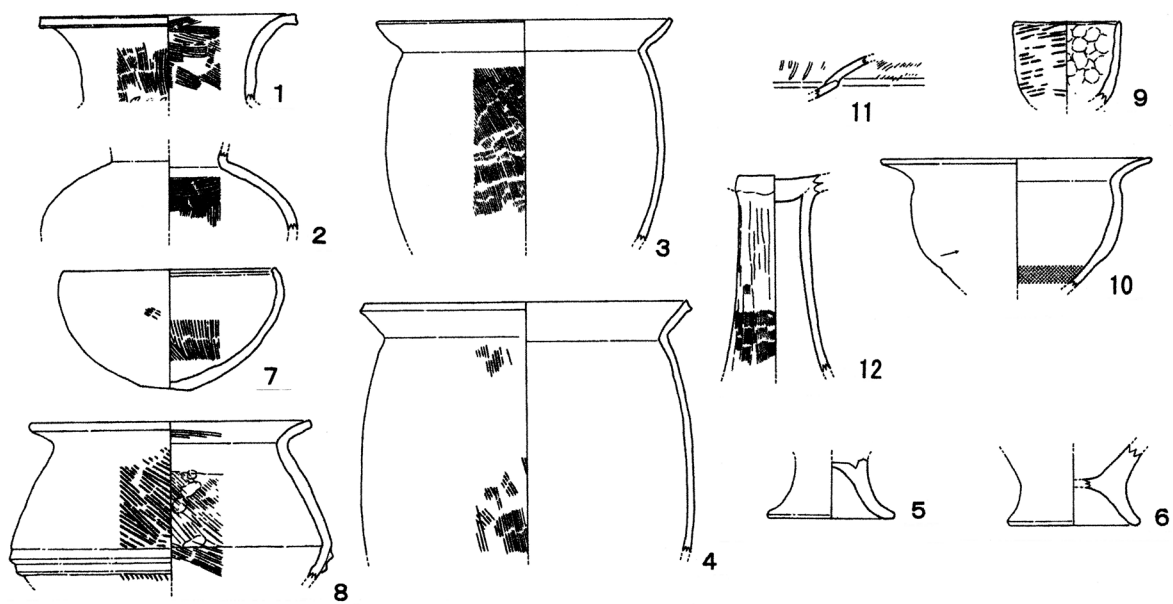
古墳前期は、Ⅰ期からⅣ期に区分して、久住編年のⅡA期（布留0式古段階）、ⅡB期（布留0式新段階）、ⅡC期（布留1式）、ⅢA期（布留2式）に対応する。今回の遺構変遷案では、「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺」『西海考古』第12号（宮崎2022b）に示した甕棺墓と富の原型壺の編年について変更を加えている（201405・3区ST6は後期Ⅰ期→Ⅱ期、201405・5区ST1 後期Ⅲ→Ⅱ期）。

竹松遺跡は、弥生中期後葉に弥生集落が形成されるが、竪穴住居跡と甕棺などの墳墓の検出傾向からみると、弥生後期Ⅱ期とⅢ期の弥生後期前葉段階が最も遺構の数が多い。Ⅱ期の2013B1区SC123竪穴住居跡では、後漢鏡の細線式獣帯鏡の破鏡が出土しており、岡村秀典漢鏡編年5期の資料で破鏡としては古い段階に位置付けられる。弥生集落は弥生後期Ⅶ期（弥生後期末新段階）まで続くが、後期Ⅴ期頃から住居数が減少し、Ⅶ期の弥生終末でいったん集落が消滅する。古墳前期Ⅰ期（古墳初頭・布留0式古段階）には201403-3区に周溝をもつ約12mの円墳が築造され、Ⅱ期・Ⅲ期（古墳前期前葉・後葉期）には201405-1・2・4・5区で集積土器群（SU）が認められる。そして古墳前期Ⅳ期（布留2式）の古墳前期末になって201407-2区に竪穴住居が設けられ古墳集落が形成されてくる遺跡の動向が見えてきた。以上のように竹松遺跡では、石庖丁の製品は32点出土しているが、安山岩系石材を主体とする片刃石庖丁で、未製品が2点出土している。片刃石庖丁は、Ⅱ期からⅣ期の住居跡から出土しており、Ⅱ期の弥生後期前葉古段階には製作されていたことが確認され、未製品があることから、本集落で片刃石庖丁の生産が行われていたことが明らかとなった。

4. 遺構出土の片刃石庖丁

竹松遺跡以外の長崎県本土地域で、片刃石庖丁が出土している遺構資料を見ていきたい。図7上段は、諫早市西ノ角遺跡の竪穴住居跡の一括出土土器と片刃石庖丁である。内湾する口縁の台付甕（3）と「く」の字形口縁の北部九州系甕（4）、朝顔形に開く口縁で胴部との境界に列点文を施す熊本系壺（1）、偏球形胴部の長頸壺（2）、屈曲する杯部で北部九州系の高杯（11）、碗形の鉢（7）、製塩土器の可能性をもつ細いタタキ目をもつ小さな鉢（9）、台付鉢（10）などが出土しており、弥生後期Ⅴ期（弥生後期後葉新段階）の資料である。「肥前型器台」の再検討『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号では、表2の土器編年案でⅠ期（弥生後期後葉古段階）に置いたが、弥生後期Ⅴ期（弥生後期後葉新段階）に修正しておきたい。28は、安山岩製の片刃石庖丁で形態はC型である。

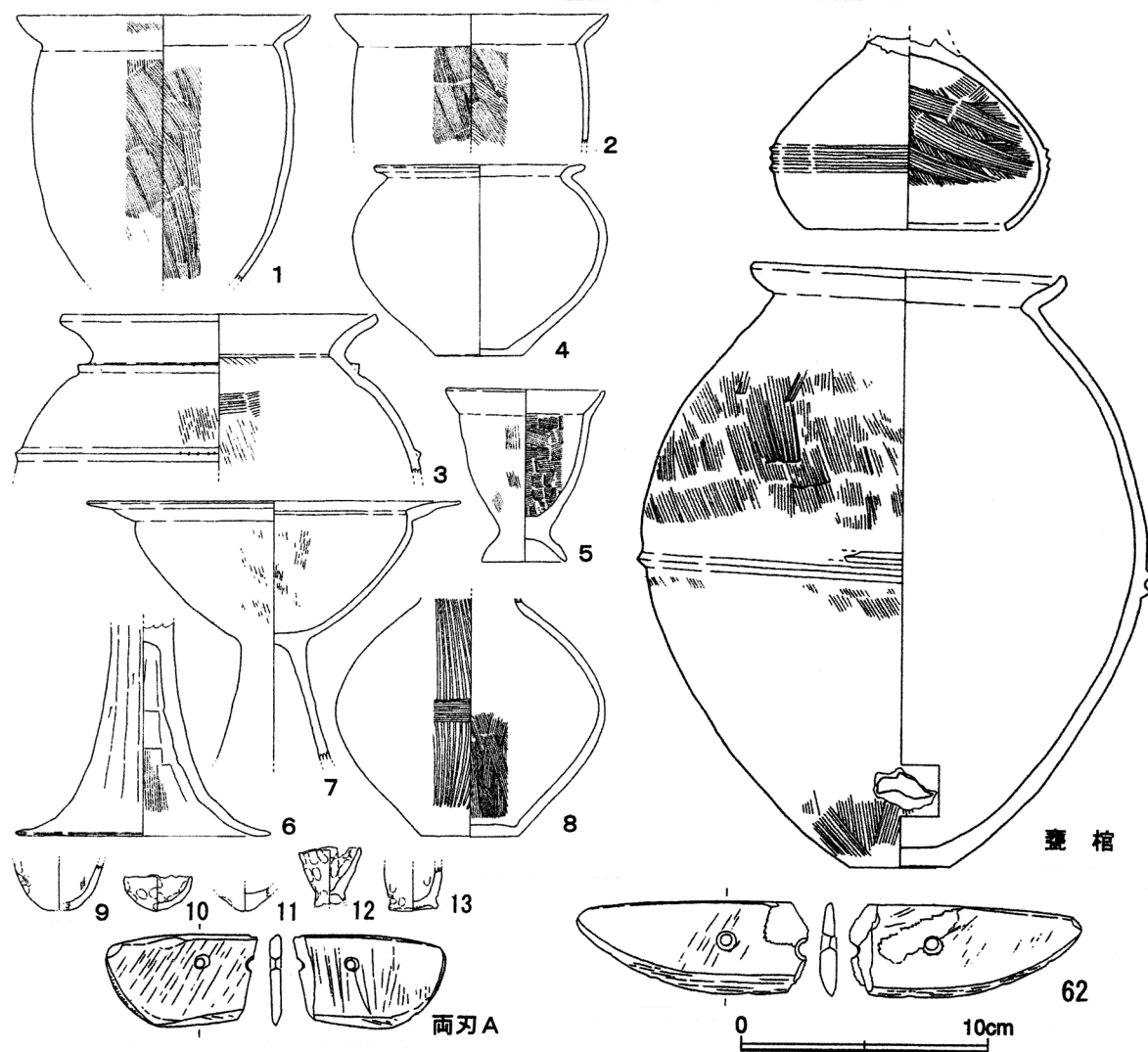
図7の下段は、雲仙市佃遺跡の87区SB1竪穴住居出土土器と小児甕棺である。先端が尖り気味の内湾傾向の口縁をもつ台付甕（16・17）、小形の台付甕（20）、「く」の字形に外反する広口壺（18）、鋤先形口縁の高杯（22）、手捏土器（24～28）がある。口縁が小さく外湾する広口壺（19）と胴部に張りをもつ壺（23）は、丹塗土器であり、SB1竪穴住居跡の内にあって削平されている弥生中期末のSB2竪穴住居跡から混入した可能性が高い。SB1竪穴住居跡出土土器は弥生後期Ⅳ期（弥生後期後葉古段階）の資料であり、住居内にある甕棺もSB1竪穴住居の廃止に伴って設けられたと推測されることから弥生後期Ⅳ期と推測される。「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺」ではこの甕棺はⅠ期（後期初頭）とした（宮崎2022b）が、弥生後期Ⅳ期への修正の必要がある。石庖丁は、両刃Aの両刃石庖丁が堆積岩系の石材で形態はF型で、64は安山岩系の石材の片刃石庖丁で形態はB型である。



西ノ角住居

0 20cm

佃87区SB1



甕 棺

両刃A

0 10cm

図7 石庖丁出土遺構土器①(1/6)と石庖丁(1/3)

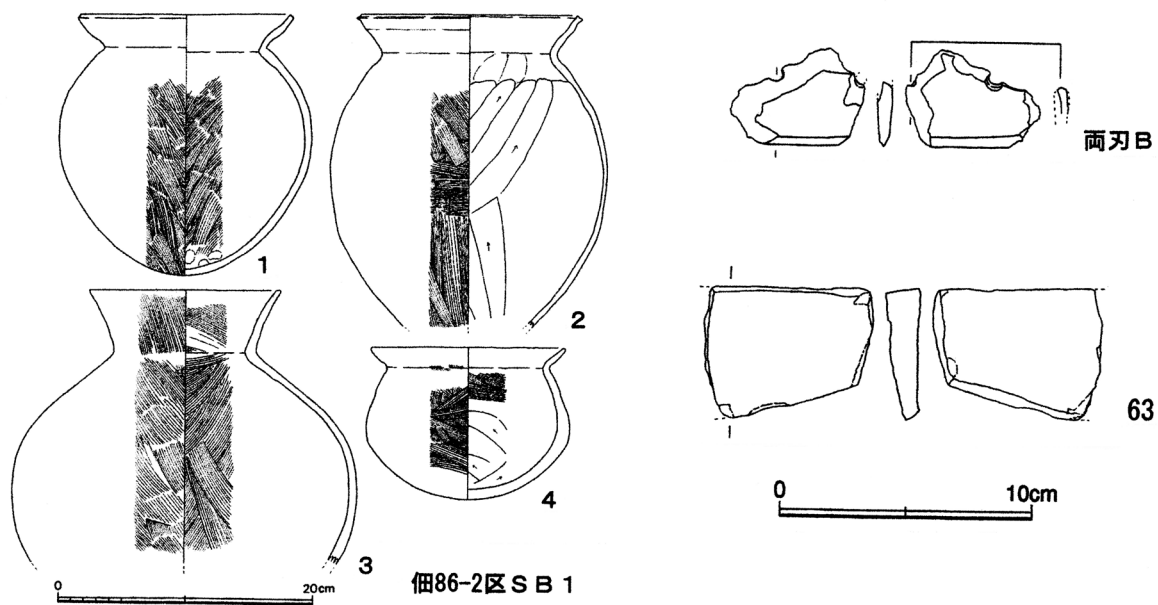
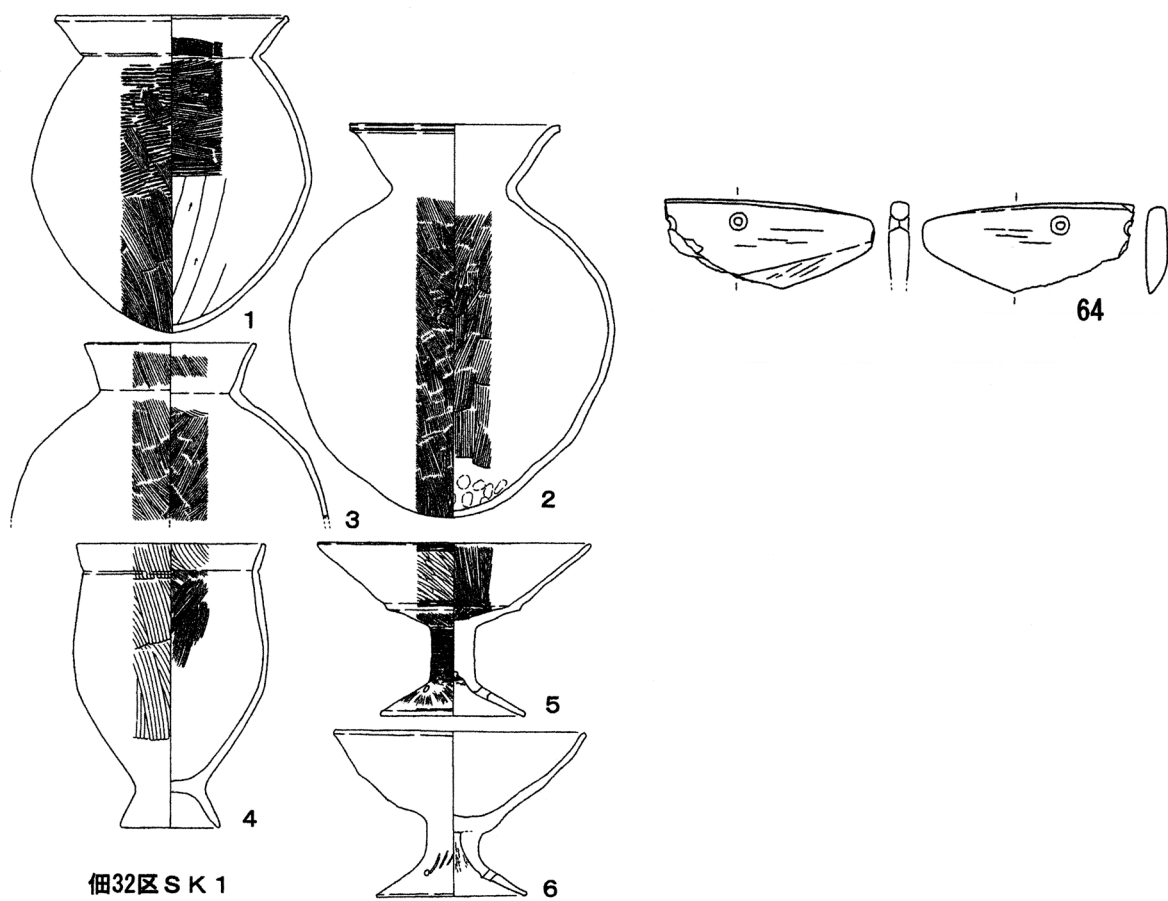


図8 石庖丁出土遺構土器②（1／6）と石庖丁（1／3）

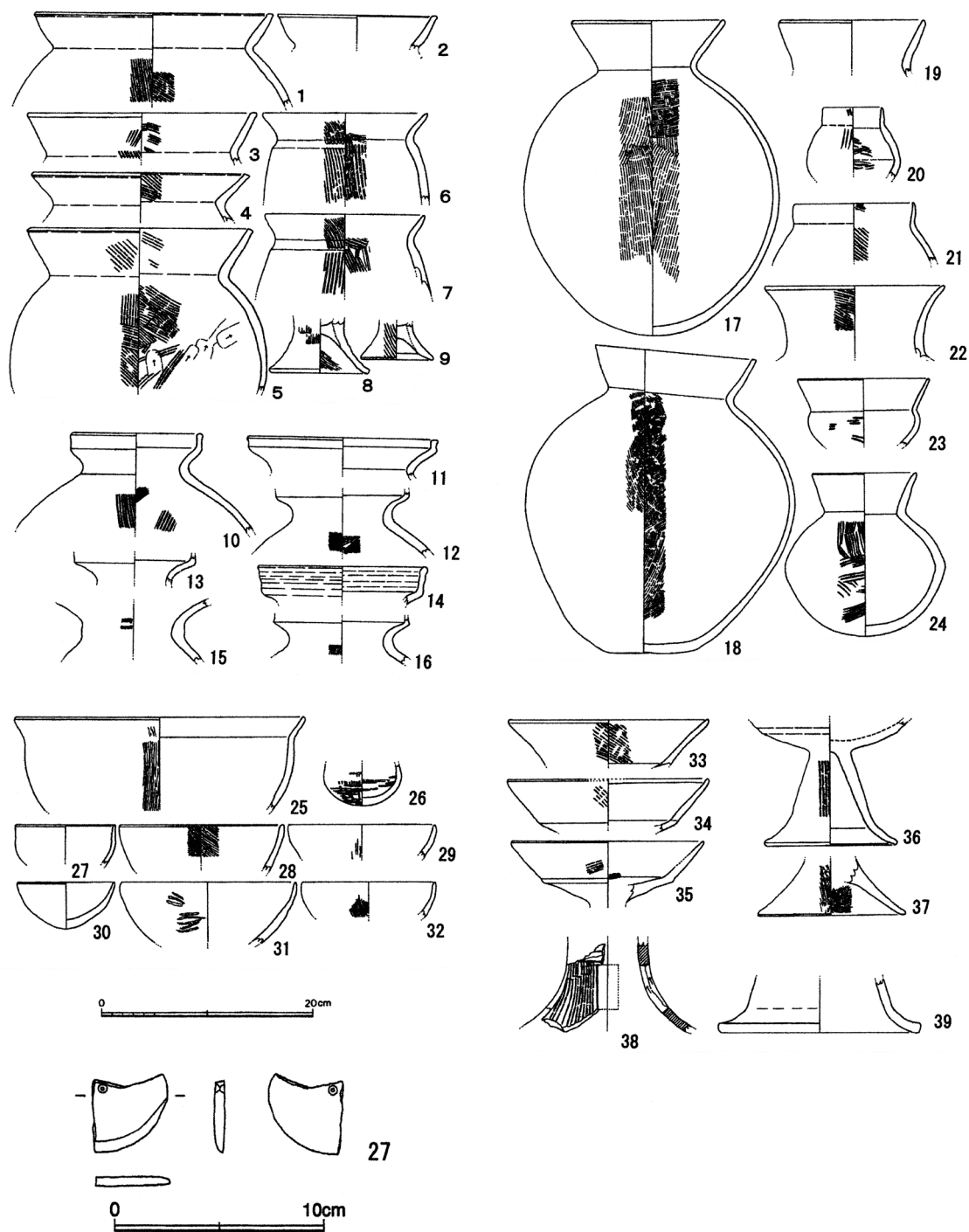


図9 石庖丁出土遺構土器③(1/6)と石庖丁(1/3)

図8上段は、佃遺跡32区SK1土坑出土品である。庄内式系甕(1)と台付甕(4)、長頸壺(2・3)、伝統的V様式系高杯(5)とそれを模倣した高杯(6)がある。出土土器は、古墳前期Ⅰ期(布留0式古段階)の古墳前期初頭段階の資料である。片刃石庖丁は安山岩系石材で形態はB型である。

図8下段は、佃遺跡86-2区SB1竪穴住居跡出土の土器で、布留型甕(8)、伝統的V様式系甕(7)、長頸壺(9)、小形甕(10)があり、古墳時代前期Ⅱ期(布留0式新段階)の古墳前期前葉段階の資料である。石庖丁については、両刃Bの両刃石庖丁は堆積岩系石材で形態は不明。64は、角閃石安山岩の未製品である。

図9は、諫早市小野曾屋遺跡の5層から出土した土器である。甕は、布留型甕（1～5）と台付甕（6・7）があり、口縁を摘まみ上げた在地系の二重口縁壺（10～13、15・16）、二重口縁の吉備系壺？（14）、口頸部が開く広口壺（17・18）、直口壺（20・21）、小形壺（24）、小型丸底鉢（23）、スカート脚の高杯（33～36）、体中部の幅が狭くなった最終的な肥前型器台（38）などが出土しており、古墳前期Ⅲ期（布留1式）の古墳前期後葉段階の資料である。片刃石庖丁は大半を欠損しているが、安山岩製で形態はC型であろう。この他に、遺構から出土した石庖丁については、大村市稗田遺跡の住居跡床面から出土している粘板岩製の両刃石庖丁2点と安山岩製の片刃石庖丁（表2－16）がある。この住居跡は4軒が重複しており、片刃石庖丁は最終の古墳前期Ⅲ期（布留1式）の古墳前期後葉段階の資料である可能性をもっている。

片刃石庖丁については、今回竹松遺跡の遺構出土品並びに長崎県本土地域の遺構出土品を検討した結果、弥生時代後期前葉古段階（弥生後期Ⅱ期）から古墳前期後葉段階（古墳前期Ⅲ期）にかけて生産が行われていたことが明らかとなった（表4）。

2022年の「肥前型器台」の再検討『埋蔵文化財センター研究紀要』第12号では、長崎県本土地域

表4 長崎県本土地域の弥生後期～古墳前期の遺構と土器編年案（ゴチは片刃石庖丁出土遺構） 2023.3現在

地域 時期	県北・五島	彼杵・大村 (竹松)	諫 早	島原半島北部	島原半島南部 (今福)
弥 生 後 期	I 期	201407・1区SK10 201506・2区SK9			
	II 期	201303・A5区SC1 201303・B1区SC123 201407・1区SC6		佃84区SB1 一野2号住居	
	III 期	201406・3区SC11 201302・4区SX5 B区SC1 (217集)			
	IV 期	201303・B1区SC124 201407・4区SC13 201506・2区SC15		佃87区SB1 陣ノ内2号住居 三会西川溝	B区3号溝Ⅱ・Ⅲ層
	V 期	201407・4区SC12 白井川2号住居	西ノ角住居		B区3号溝Ⅰ層
	VI 期	橘第Ⅱ地点堅穴 201403・3区SC3 201404・B6東区SC4 白井川3号住居		龍王14区SB4 十園26区SD1 十園26区SD2	C区住居
	VII 期	門前2号集積土坑 201403・3区SC1 201404B8北区SP1081		龍王13・14区SB5 龍王14区SB1 龍王22区SB4	
古 墳 前 期	I 期	門前2号住居 橘第Ⅰ地点 202403・3区SZ1		佃84区SK1 龍王13・14区SB6 龍王22区SB5	
	II 期	長畑馬場2号住居 201405・2区SU6 201405・2区SU8 201405・4区SU13 201405・4区SU14	有喜上原2号住居	佃86-2区SB1 松尾土坑 龍王14区SB2 龍王31区SB1 龍王方形環濠(古) 守山大塚古墳?	
	III 期	201405・1区SU1 201405・2区SU7 201405・5区SU12 稗田住居(最終)	小野曾屋5層	龍王12区SB1 龍王方形環濠(新) 丸塚古墳?	
	IV 期	201407・2区SC15 201407・2区SC16 201405・4区SC16		龍王5区SB1	

の弥生時代後期～古墳時代初頭前後の土器編年案を提示した（宮崎 2022 a）が、今回の竹松遺跡の遺構変遷を踏まえ現時点における試案を、長崎県本土地域の弥生後期～古墳前期の遺構と土器編年案（表 4）として提示した。表 4 は、今後の議論を行って行く上での「たたき台」としていただきたいが、長崎県本土地域の弥生後期～古墳前期の土器編年の詳細については、修正・補正をした論稿を別途発表する機会をもちたい。

5. 片刃石庖丁の評価について

片刃石庖丁については、2005 年度の長崎県考古学会を雲仙市で開催された折に、小郡市の宮田浩之氏が会場に展示されていた佃遺跡出土の石庖丁すべてが片刃石庖丁であり、九州地方の他の遺跡では見られない特異な存在であると指摘されたことに端を発する。佃遺跡の石庖丁については、村子晴奈氏が長崎県考古学会の 2012 年度大会において発表され（村子 2012）、2013 年には、村子氏によって調査報告書がまとめられた（村子編 2013）。2019 年には、筆者が「長崎県本土地域の磨製石庖丁－片刃石庖丁を中心として－」『埋蔵文化財センター研究紀要』第 9 号で、長崎県本土地域の石庖丁を集成してまとめるなかで、片刃石庖丁が出現した契機と背景について考察を行った（宮崎 2019 a）。

今回、その後に刊行された調査報告書を見直して、大村市川端遺跡（表 1－9 の 21・22）と島原市畑中遺跡（表 1－21 の 69）で片刃石庖丁の出土を確認した。現在のところ、片刃石庖丁は、長崎県本土部 22 箇所の遺跡と佐賀県西部地域 5 箇所の遺跡から出土が確認されている（図 1）。長崎県本土地域において片刃石庖丁製品の出土が多いのは、門前遺跡 9 点、竹松遺跡 33 点、佃遺跡 22 点、茂手遺跡 14 点などである。未製品については、門前遺跡 1 点（安山岩）、竹松遺跡 2 点（安山岩系）、佃遺跡 6 点（安山岩系 5、堆積岩系 1）、佐賀県西部地域の武雄市茂手遺跡 1 点（両輝石安山岩）が出土しており、集落で片刃石庖丁の生産が行われていたことが分かる。

表 5 は、未製品を出土して片刃石庖丁を生産していたことが推測される門前・竹松・佃・茂手遺跡における片刃石庖丁の石材別点数である。それによると、門前遺跡では安山岩 7 点、玄武岩 1 点、砂

表 5 4 遺跡における片刃石庖丁の石材

石材 遺跡	玄武岩・安山岩系					堆積岩		他	不明	合計	未製品の石材
	玄武岩	安山岩	角閃石 安山岩	両輝石 安山岩	デイサイト	堆積岩 泥岩	砂岩	結晶片岩			
門前	1	7					1			9	安山岩 1 点
竹松		27			3	1		1		32	安山岩 2 点
佃		7	8			6	1			22	角閃石安山岩 5、砂岩系 1 点
茂手				11			1		2	14	両輝石安山岩 1

表 6 4 遺跡における片刃石庖丁の形態

形態 遺跡	B	C	D	E	F	G	不明	合計
門前	2	1	1		4		1	9
竹松	4	4			11	6	7	32
佃	5	1		4	6	2	4	22
茂手	9		2	1		1	1	14

岩 1 点、竹松遺跡では石鎌転用品を除いた 32 点で安山岩系 29 点、デイサイト 3 点、泥岩 1 点、結晶片岩 1 点、佃遺跡では安山岩系 15 点、砂岩堆積岩系 7 点で、武雄市の茂手遺跡は安山岩系 11 点、砂岩系 1 点、不明 1 点であり、4 遺跡いずれも玄武岩・安山岩系石材が主体を占めている。

表 6 は、同じく片刃石庖丁の形態別の点数である。片刃石庖丁の形態には、B～G の形態があり、門前遺跡・竹松遺跡・佃遺跡では F 型が多く、次に門前遺跡と佃遺跡では B 型、竹松遺跡では G 型が多い傾向をもつが、茂手遺跡では B 型が多く F 型が見られないなど、4 遺跡において製作された形態の差異が認められる。これら未製品が出土した遺跡では、玄武岩・安山岩系石材が集落に持ち込まれ片刃石庖丁が製作されたが、画一的な形態を製作する決まりはなかったことが分かる。地域の中核となる 4 遺跡では、片刃石庖丁が生産され、周辺集落へ配布し、流通していたことが想定される。

2019 年の論稿では、片刃石庖丁出現の契機と背景について論じた（宮崎 2019 a）。

①対馬南部産の堇青石ホルンフェルスと層灰岩が、弥生前期後半以降に対馬から壱岐へ運ばれ、壱岐の原の辻遺跡において堇青石ホルンフェルス製石庖丁・石鎌と層灰岩製石斧が大量に生産され、本土各地へ流通していたことを能登原孝道氏と森貴教氏が明らかにしている（能登原 2014、森 2013）。

②原の辻遺跡では、台地北部から北西部の低地において石器工房が営まれ、石庖丁・石鎌・石斧などの生産を行っていたが、弥生後期に低地の工房跡と低地居住がなくなってしまうことが調査で判明していたが、その後の調査で、弥生中期の終わり頃の大規模な水害に伴って低地部の水没によって灰白色粘土に覆われていることが確認され、この大水害によって原の辻遺跡の低地部にあった居住域や船着き場が壊滅的な被害を受けたことが推定されることになった（古澤・松見 2016）。このように原の辻遺跡では、弥生中期の終わり頃に起きた大水害で石器工房が壊滅したことによって、「石器流通システム」から「鉄器流通システム」へ、交易機構が転換したことが想定されるのである。

③この原の辻遺跡の石器生産拠点の消滅という事態は、壱岐原の辻遺跡から供給を受けていた九州本土の弥生社会に深刻な影響を与え大きな画期をもたらした。九州本土内では、新たな地元石材の開発と調達が必要となり、製品製作と流通のあり方に大きな変化と転換をもたらすことになった。

④吉野ヶ里遺跡を中心とした佐賀平野の弥生時代石器を分析した渡辺芳久氏は、能登原氏が指摘している堇青石ホルンフェルス製石庖丁の流通が弥生中期後半～末に衰退するという見解を引用して、「弥生時代後期は立岩産石庖丁が継続してみられるものの、特に玄武岩質安山岩製石庖丁の盛行が注目される。同石材の石庖丁は佐賀平野を中心に分布するが、未製品は佐賀平野東部、特に本遺跡及び隣接する吉野ヶ里町松原遺跡に集中している」として、堇青石ホルンフェルス製石庖丁の「流通品の衰退後も、穂積具としての石庖丁は需要があり、継続して使用されていた。そのため、別の複数地域（片岩、玄武岩質安山岩等）から素材あるいは未製品の状態で石材を調達し、小規模ながらも集落内で製作されていた可能性が高い」としている（渡辺 2014 P. 5）。そして、弥生後期に佐賀平野を中心に流通する玄武岩質安山岩の石庖丁の原産地を、佐賀・長崎県境の多良岳が考えられるとしている（渡辺 2014 P. 1）。ここでは、渡辺氏が論じている佐賀平野に流通する玄武岩質安山岩の石庖丁とは、「両刃石庖丁」であることを注意しておきたい。

⑥この佐賀平野で確認されている事象は、まさに原の辻遺跡の「弥生中期の終わり頃」の石器工房の壊滅・消滅という事態と軌を一にした連動的な出来事であったことが明確になってきたのである。

多良山系の地質図を示したのが図 10 である。多良岳火山は更新世前～中期に活動した第四紀成層

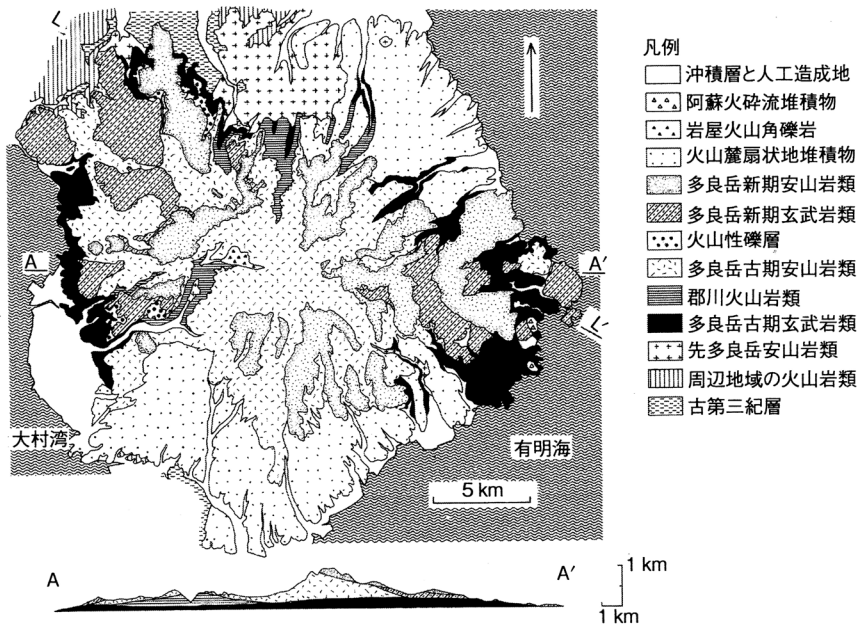


図 10 多良岳の地質図 (原図小形昌徳、中田 2010)

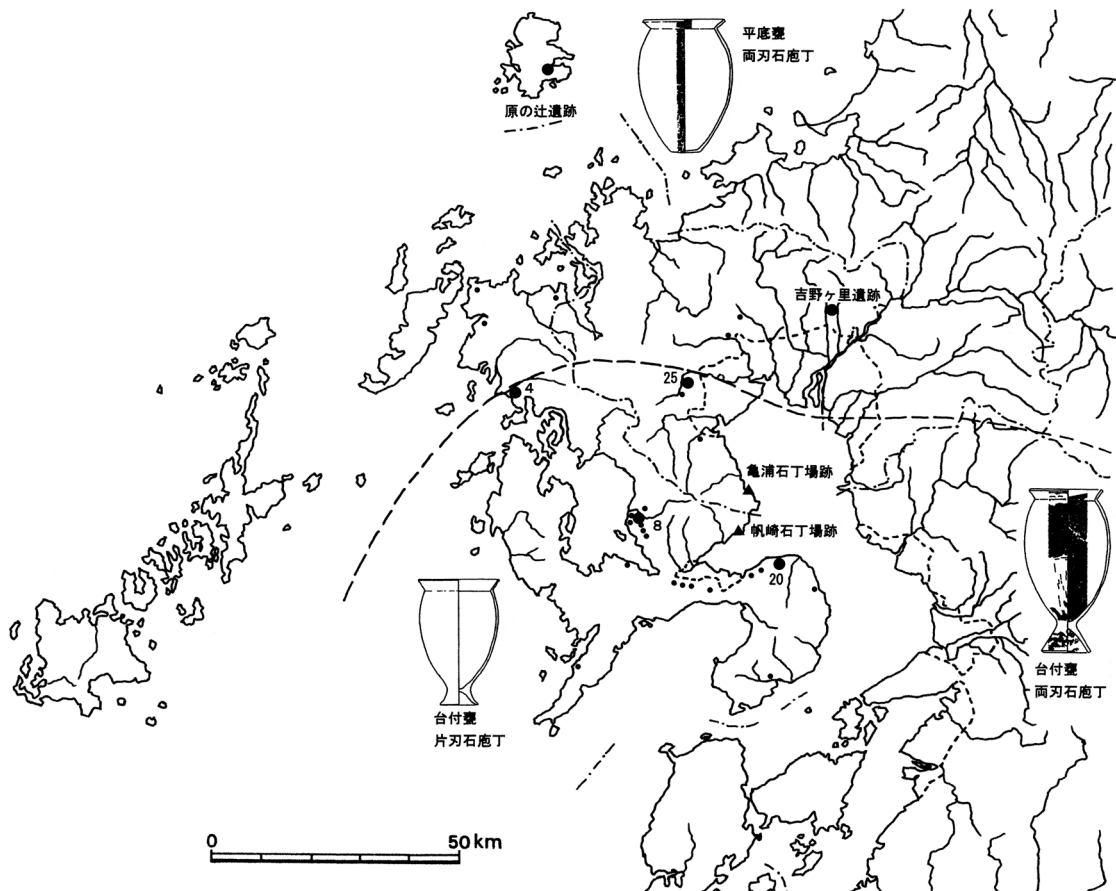


図 11 台付甕地域と平底地域と片刃石庖丁出土遺跡
未製品出土遺跡=片刃石庖丁を製作した遺跡 (4 門前、8 竹松、20 佃、25 茂手)

火山であり、第三紀層の基盤の上に玄武岩類と安山岩類の溶岩によって形成されている。渡辺芳久氏
がいう玄武岩質安山岩は、中田節也氏が解説する「多良岳古期玄武岩類」（図 10 の黒色）に相当する
もので、佐賀県太良町から長崎県諫早市小長井町付近と大村市の丘陵部に産地が広がっている。また
古期安山岩類と新期安山岩類はデイサイト質としている（中田 2010）。玄武岩質安山岩の産地は、有
明海側で江戸時代の佐賀藩諫早領で「帆崎石」が切り出されていた石切場として、亀浦石丁場跡（佐
賀県太良町大浦）と帆崎石丁場跡（諫早市小長井町牧）があり、町と市の文化財に指定されている。
この場所が有明海側の玄武岩質安山岩の原産地であり、佃遺跡と茂手遺跡に運ばれて「片刃石庖丁」
が製作され、佐賀平野にも運ばれ「両刃石庖丁」が製作されていたことが推測される。また大村湾側
の竹松遺跡では大村側の玄武岩質安山岩を用いて「片刃石庖丁」が製作され、門前遺跡ではこの大村
側の玄武岩質安山岩の産地から運ばれた石材で「片刃石庖丁」が製作されたことが推測される。

2019 年の 4 月に自費出版した『長崎地域の考古学研究』では、同論文を所収するにあたり、「地元
石材の利用が片刃石庖丁を生み出した」という節を追加した（宮崎 2019 c）。それをまとめたい。

①弥生時代後期になると、長崎県本土地域の台付甕地域では「片刃石庖丁」が主体になるが、それ
以外の九州地方では「両刃石庖丁」のままである。玄武岩質安山岩を用いて吉野ヶ里遺跡を中心とし
た佐賀平野では「両刃石庖丁」を製作し、長崎県本土地域では「片刃石庖丁」を製作していた。

②料理用庖丁は、〈両刃〉が素材を二つに切り分ける機能を持ち、〈片刃〉は切れたものを薄く削
ぐ作業に向いていて右利きと左利きの双方がある。しかし、穂積具として石庖丁を使用する場合には、
〈両刃〉と〈片刃〉に機能的な優劣の差があるようには思えない。

③では、なぜ〈両刃〉から〈片刃〉に変化したのであろうか。まず石材から見ていくと、堇青石ホ
ルンフェルスの頁岩系素材は石庖丁の製品として加工しやすい軟質素材であるが、玄武岩質安山岩は
硬質な素材であり、石庖丁に加工して仕上げるには相当の手間と時間がかかることが考えられる。

④石庖丁には B 型の〈外湾刃半月形〉という基本的な形態のモデルがある。しかし、玄武岩質安
山岩は硬質なため、素割りした素材の形態に規定されて石庖丁の製作を行っていたことが推測される。
つまり、「片刃石庖丁」を生産した 4 遺跡ではそれぞれ多い形態があり、多様性（バラエティー）を
もつが、それは素割りした素材の形態に応じて製作されたことが推察される。石庖丁の刃の研ぎを〈両
刃〉から〈片刃〉に変換したことについては、硬質素材から手間と工程を省いて、製品を製作する〈片
刃〉だけの「片刃石庖丁」を創出したことが考えられる。

⑤図 11 は、北部九州系平底甕地域と台付甕地域をラインで区切っているが、「片刃石庖丁」は台
付甕地域外となる松浦市今福遺跡、平戸市里田原遺跡、佐世保市大野台遺跡、佐賀県小城市天神軒遺跡、
同市寺浦廃寺跡の平底甕地域でも出土している。また台付甕地域の佐賀県鹿島市則重遺跡では、弥生
後期前葉段階の竪穴住居跡で北部九州系土器が伴って、〈両刃〉と〈片刃〉の石庖丁が出土している。

それは双方の地域の集団間で、土器とともに石庖丁も流通する相互交流があったことが分かる。

おわりにー「佃型石庖丁」の提唱ー

2022 年の「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討」『西海考古』第 12 号では、有明海北岸
の筑紫平野の弥生社会を農耕民の「流域社会」として、長崎県本土地域の弥生社会を海民が活動する

「海域社会」として捉え、相互交流を行っていたことを想定した（宮崎 2022 b）。長崎県本土地域は水田地が少ない土地で、海上交易を主力な生業としていたが、『魏志』倭人伝の「食するに足らず」という食糧事情を少しでも改善するため、小規模ではあるが谷底平野で水田を営み、穂積具として「片刃石庖丁」が使用されていた。今回、竹松遺跡出土の片刃石庖丁の検討を行ったが、長崎県本土部の門前遺跡、竹松遺跡、佃遺跡と、佐賀県西部の茂手遺跡などの中核集落で製作され配布されていたことが判明した。この地域は、煮炊き具の台付甕と「肥前型器台」を共有しており、「片刃石庖丁」も地域の独自性を表す資料として評価することができる。このように「片刃石庖丁」は、台付甕地域の文化的特性を示す資料であり、研究の発端となった佃遺跡を標式として、「佃型石庖丁」の名称を提唱したい。

【基本となる調査報告書】（表 1 の文献番号に対応）

- 1 中田敦之・高原愛編 1998『松浦・今福遺跡』松浦市文化財調査報告書第 14 集 松浦市教育委員会
- 2 村川逸朗編 1988『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第 3 集 田平町教育委員会
- 3 馬場聖美・富永百合子編 2003『里田原遺跡』田平町文化財調査報告書第 9 集 田平町教育委員会
- 4 正林護ほか編 1983『大野台遺跡』鹿町町文化財調査報告書第 1 集 鹿町町教育委員会
- 5 副島和明編 2006『門前遺跡』長崎県文化財調査報告書第 190 集 長崎県教育委員会
- 6 杉原敦史・松尾秀昭編 2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第 4 集 長崎県教育委員会
- 7 稲富裕和・橋本幸男編 1988『稗田遺跡』大村市稗田遺跡調査会
- 8 稲富裕和編 1980『黒丸遺跡』大村市黒丸遺跡調査会
- 9 大野安生・安部憲毅編 1997『黒丸遺跡ほか発掘調査概報 VOL. 1』大村市文化財調査報告書第 20 集 大村市教育委員会
- 10 稲富裕和・橋本幸男編 1987『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第 12 集 大村市教育委員会
- 11 大野安生・安部憲毅編 1998『富の原遺跡』大村市文化財調査報告書第 23 集 大村市教育委員会
- 12 山梨千晶編 2019『川端遺跡Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 34 集 長崎県教育委員会
- 13 小松義博編 2018『立小路遺跡』長崎県文化財調査報告書第 216 集 長崎県教育委員会
- 14 中川潤次編 2017『小路口遺跡』長崎県文化財調査報告書第 213 集 長崎県教育委員会
- 15 橋本幸男編 1996『小野扇町遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会報告書第 2 集 諫早市埋蔵文化財調査協議会
- 16 川瀬雄一編 1994『小野宗方遺跡』諫早市文化財調査報告書第 13 集 諫早市教育委員会
- 17 川瀬雄一編 1995『小野曾屋遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会
- 18 高野晋司編 1985『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第 73 集 長崎県教育委員会
- 19 松藤和人編 1986『伊木力遺跡』多良見町・同志社大学考古学研究室
- 20 立石 明編 2004『深堀遺跡』長崎市教育委員会
- 21 辻田直人・村子晴菜編 2017『十園遺跡Ⅲ・伊古遺跡Ⅳ』雲仙市文化財調査報告書第 16 集 雲仙市教育委員会
- 22 正林護・永嶋豊編 1998『陣ノ内遺跡』瑞穂町文化財調査報告書第 3 集 瑞穂町教育委員会
- 23 辻田直人編 2008『佃遺跡』雲仙市文化財調査報告書第 4 集 雲仙市教育委員会
- 24 村子晴奈編 2013『佃遺跡Ⅱ』雲仙市文化財調査報告書第 12 集 雲仙市教育委員会
- 25 松元一浩編 2021『畑中遺跡』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 39 集 長崎県教育委員会
- 26 宮崎貴夫・町田利幸編 1985『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第 77 集 長崎県教育委員会
- 27 中尾篤志ほか編 2017『竹松遺跡Ⅱ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 5 集 長崎県教育委員会
- 28 古門雅高編 2018『竹松遺跡Ⅲ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 6 集 長崎県教育委員会
- 29 中川潤次編 2019『竹松遺跡Ⅳ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 11 集 長崎県教育委員会
- 30 杉原敦史編 2020『竹松遺跡Ⅴ』新幹線文化財調査事務所調査報告書第 12 集 長崎県教育委員会
- 31 中川潤次編 2017『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県文化財調査報告書第 214 集 長崎県教育委員会
- 32 中尾篤志編 2019『竹松遺跡』都市計画道路池田沖田線街路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長崎県文化財調査報告書第 217 集 長崎県教育委員会
- 33 加田隆志編 1991『則重遺跡・正願地遺跡』鹿島市文化財調査報告書第 8 集 鹿島市教育委員会
- 34 加田隆志編 1996『則重遺跡（C 地区）・吉丸遺跡』鹿島市文化財調査報告書第 10 集 鹿島市教育委員会
- 35 原田保則編 1986『みよこ遺跡』『茂手遺跡』武雄市文化財調査報告書第 15 集 武雄市教育委員会
- 36 太田正和・前田佳奈子編 2015『天神軒遺跡』小城市文化財調査報告書第 27 集 小城市教育委員会

【引用・参考文献】

- 岡村秀典 1999『三角縁神獣鏡の時代』吉川弘文館
- 蒲原宏行 2019『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄ほか 2017『九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会
- 中尾篤志 2005「石鎌」『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』長崎県文化財調査報告書第30集 長崎県考古学会
- 中田節也 2010「多良岳」『九州・沖縄地方』日本地方地質誌8 朝倉書店
- 瀬戸田佳男 1998「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 能登原孝道・中野伸彦・小山内康人 2007「いわゆる「頁岩製砂岩」の原産地について」『九州考古学』82 九州考古学
- 能登原孝道 2014「北部九州における石庖丁の生産と流通」『東アジア古文化論攷』高倉洋彰先生退職記念論集
- 古澤義久・松見裕二 2016「原の辻遺跡の盛衰」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫 2019 a「長崎県本土地域の磨製石庖丁・片刃石庖丁を中心にしてー」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 長崎県埋蔵文化財センター
- 宮崎貴夫 2019 b「原の辻・船着き場跡の土器から見えてくるもの」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 長崎県埋蔵文化財センター
- 宮崎貴夫 2019 c『長崎地域の考古学研究』（自費出版）
- 宮崎貴夫 2022 a「「肥前型器台」の再検討」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号 長崎県埋蔵文化財センター
- 村子晴奈 2012「島原半島北部の遺跡」『有明会をめぐり弥生時代集落と交流』長崎県考古学会・肥後考古学会
- 宮崎貴夫 2022 b「在地壺と搬入された甕棺・大甕・大壺の検討」『西海考古』第12号 西海考古同人会
- 森 貴教 2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景ー「層灰岩」製片刃石斧を中心にー」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会
- 渡辺芳人 2014「吉野ヶ里遺跡出土の弥生時代石器について」『平成26年度九州考古学総会研究発表資料』九州考古学会

〈釜山市 - 長崎県東アジア考古学共同研究成果〉

韓国釜山老圃洞遺跡出土「脚付三連壺」の意義

白石溪沔・申東昭

翻訳 白石溪沔

-
- I. はじめに
 - II. 福岡県福岡市那珂遺跡 64 次調査出土「脚付三連壺」
 - III. 韓国釜山老圃洞遺跡出土「脚付三連壺」
 - IV. 那珂遺跡群 64 次調査と老圃洞遺跡 6 次調査出土資料の相違点
 - V. 釜山老圃洞遺跡出土の「脚付三連壺」から見た日韓交流
 - VI. 終わりに
-

｜ 要旨 ｜

脚付三連壺は、一つの脚部に三個の小壺が三角形に付着した異形土器である。接続した小壺の胴体部を貫通する透孔を特徴としており、小壺に含まれた液体がこの穴を通して循環することに儀礼的な意味を持つ特殊な器種と推定される。脚付三連壺は日本の福岡県那珂遺跡出土事例のみ知られていたが、最近報告された韓国の釜山老圃洞遺跡でも確認された。

本稿では日本と韓国での出土事例の観察から、老圃洞出土品が日本からもたらされた土師器系土器であることを明らかにした。また、二つの事例の比較から老圃洞遺跡例が那珂遺跡例の模倣品であり、那珂遺跡例と異なること、また液体循環の機能は重要視されず、日本列島との交流を効果的に表わす器種であったと判断した。以上の検討を基に、老圃洞遺跡出土の脚付三連壺は「伊都国」に関連する集団から、「福泉洞勢力」に関連する集団にもたらされ、こうした交渉を担った人物の墓に副葬された、という解釈を提示した。

I. はじめに

1. 2023 年共同研究の経緯と目的

長崎県埋蔵文化財センターと韓国釜山博物館は、2015 年 5 月から友好機関協定を結び、共同研究を実施している。この共同研究の成果は、例年「東アジア国際シンポジウム」において公開されてきたが、2022 年からは①職員を相互に派遣して合同発掘調査を実施すること、②共同研究の成果をそれぞれの研究論集に掲載することで合意に至った。

二年目となる 2023 年には、協議の結果、「土師器系土器」をテーマとして共同研究を実施し、釜山市古村里古墳群において合同発掘調査を実施することとなった。これは以下の理由による。

一つ目には、長崎県埋蔵文化財センターが長年調査研究を続けてきた壱岐島の特別史跡原の辻遺跡の終焉と、壱岐の古墳時代の様相について解明する手がかりになると考えられるためである。長崎県の離島である壱岐島の原の辻遺跡においては、古墳時代が始まる 3 世紀中頃には集落が衰退し、古墳時代前期後葉（Ⅲ A 期新相；4 世紀後葉～末葉）を過ぎると集落は消滅する（久住 2007b）。その後 5 世紀後半になって原の辻遺跡を見下ろす高台に大塚山古墳が築かれるまで、およそ 100 年にわたり壱岐の様相は不明となる（松見 2015）。まさにこの期間、3 世紀後半から 5 世紀の韓国嶺南地域においては、日本列島の土師器との関連が強く見いだされる「土師器系土器」と呼ばれる土器が出土する。

これは韓半島南部で広く見られる軟質土器と 150 年程度にわたり共存するが（趙 2018）、この土師器系土器の変遷を調べることによって、韓半島と日本列島との関係における、壱岐島の役割を知る手がかりが得られるからである。

二つ目には、2023 年に両機関が合同発掘調査を実施する釜山古村里古墳群は、釜山で土師器系土器が確認される 4～5 世紀代を中心に造営された中小型墳墓群であり、隣接する集落遺跡である古村里遺跡において土師器系土器が出土しているからである（東亜細亜文化財研院 2010）。今回の発掘調査でも日韓交流の様相を窺うことができる土師器系土器が出土する可能性が高いと予想された。今回発掘調査に合わせ上記の目的で土師器系土器について釜山博物館と長崎県埋蔵文化財センターが相互に理解を深め、それぞれの問題について協力して解明するならば、相互の調査研究にとって有益だからである。

以上のような理由から、2023 年は「土師器系土器」を共同研究のテーマとし、9 月 2 日から 9 月 9 日にかけて合同発掘調査を実施した。この期間のうち 9 月 4 日から 5 日にかけて、釜山博物館、鼎冠博物館、福泉博物館において資料調査を実施した。

2. 本稿の目的

土師器系土器の共同研究については、2023 年 3 月から協議を開始し、オンライン会議やメールでのやり取りによる情報交換を重ねながら、研究を進めた。このような共同研究の過程で、韓国釜山市

老圃洞遺跡 4 次調査（韓国文物研究院 2023）の 3 号木槨墓から、福岡県福岡市に所在する那珂遺跡 64 次調査（福岡市教育委員会 2000）の井戸（SE060）、および第 180 次調査（福岡市教育委員会 2022）の方形周溝墓（S0008）において報告されている「脚付三連壺」と呼ばれる土器が 2 点（あるいは 1 点）出土していることを見出した。報告書ではこの土器は土師器系土器として報告されておらず、この遺物を紹介する意味は大きいと考えられる。

そこで本稿では、まず日本国での出土事例のうち実見することができた那珂遺跡 64 次出土の「脚付三連壺」について、発掘調査報告書に基づいて出土状況等について紹介し、「脚付三連壺」がどのような遺物であると考えられるのかを韓国の研究者に紹介したい（Ⅱ章）。次に韓半島から出土した事例として老圃洞遺跡 4 次調査の出土例について、出土状況等について紹介し、日本においても特異な土器が、この地域に渡っていることを日本の研究者に紹介したい（Ⅲ章）。残念ながら諸事情により、上記の合同発掘調査および資料調査の期間において、老圃洞遺跡 4 次調査と那珂遺跡 64 次調査の資料を両機関の職員が、一緒に検討することはできなかった。そこで長崎県埋蔵文化財センター白石溪所主任文化財保護主事が、福岡市博物館の常設展に展示されている那珂遺跡 64 次調査の資料をガラスケース越しに観察した所見を掲載し、老圃洞遺跡 4 次調査の資料については、釜山博物館申東昭学芸研究士が実見した所見を掲載する。そして、それぞれに集めた観察所見を比較することで明らかとなった製作技法や「系統」（久住 1999）の相違についてまとめる（Ⅳ章）。その上で、4 世紀までは瀆盧国（とくろこく）として金官伽耶を構成する地域社会の一部であったと考えられている釜山地域（高田 2023）の木槨墓から、「脚付三連壺」が出土した意義について論じる（Ⅴ章）。

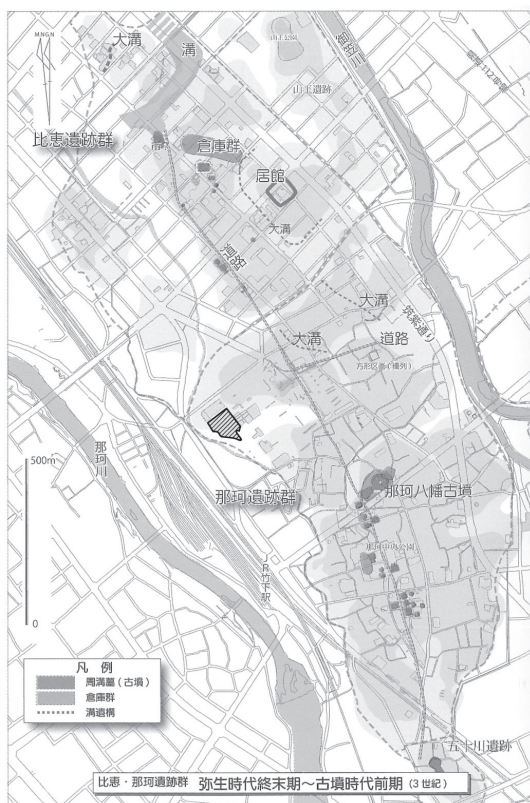
Ⅱ．福岡県福岡市那珂遺跡 64 次調査出土「脚付三連壺」

1. 比恵・那珂（ひえ・なか）遺跡群と第 64 次調査について

比恵・那珂遺跡群は、福岡県福岡市博多区に位置する（図面 1）。この遺跡群は、間に入る浅い谷によって南北に分けられ、北側を比恵〔ひえ〕遺跡群、南側を那珂〔なか〕遺跡群と呼ぶが、一連の遺跡群と考えられ、比恵・那珂遺跡群と呼ばれる。福岡平野の中央にある、御笠〔みかさ〕川と那珂川に挟まれた台地の一角がこの遺跡群の範囲であり、その範囲は南北 2km、東西 700m で面積は 130ha に及ぶ（森本 2015）（図面 2）。弥生時代の早期にさかのぼる最古の環濠集落から展開し、弥生時代末期になると延長 1.5km 以上の道路状遺構が作られるようになる。また九州最古の前方後円墳である那珂八幡古墳が築かれるなど、須玖・岡本遺跡群とならぶ「奴国」の中核集落であり、「交易センター」としての性格も想定されている（久住 2007a）この中で、第 64 次調査は那珂遺跡群のおおよそ中央部、南西方向に緩やかに舌状に伸びる丘陵の端部に位置する。現在はアサヒビール株式会社博多工場の敷地内にある（図面 3）。ここでは井戸や貯蔵穴などが多く検出されているが、「脚付三連壺」が出土した SE060（井戸）は、丘陵の端部に沿って流れる旧河道の縁に位置する（図面 4）（福岡市教育委員会 2000）。



図面 1. 比恵・那珂遺跡群位置図

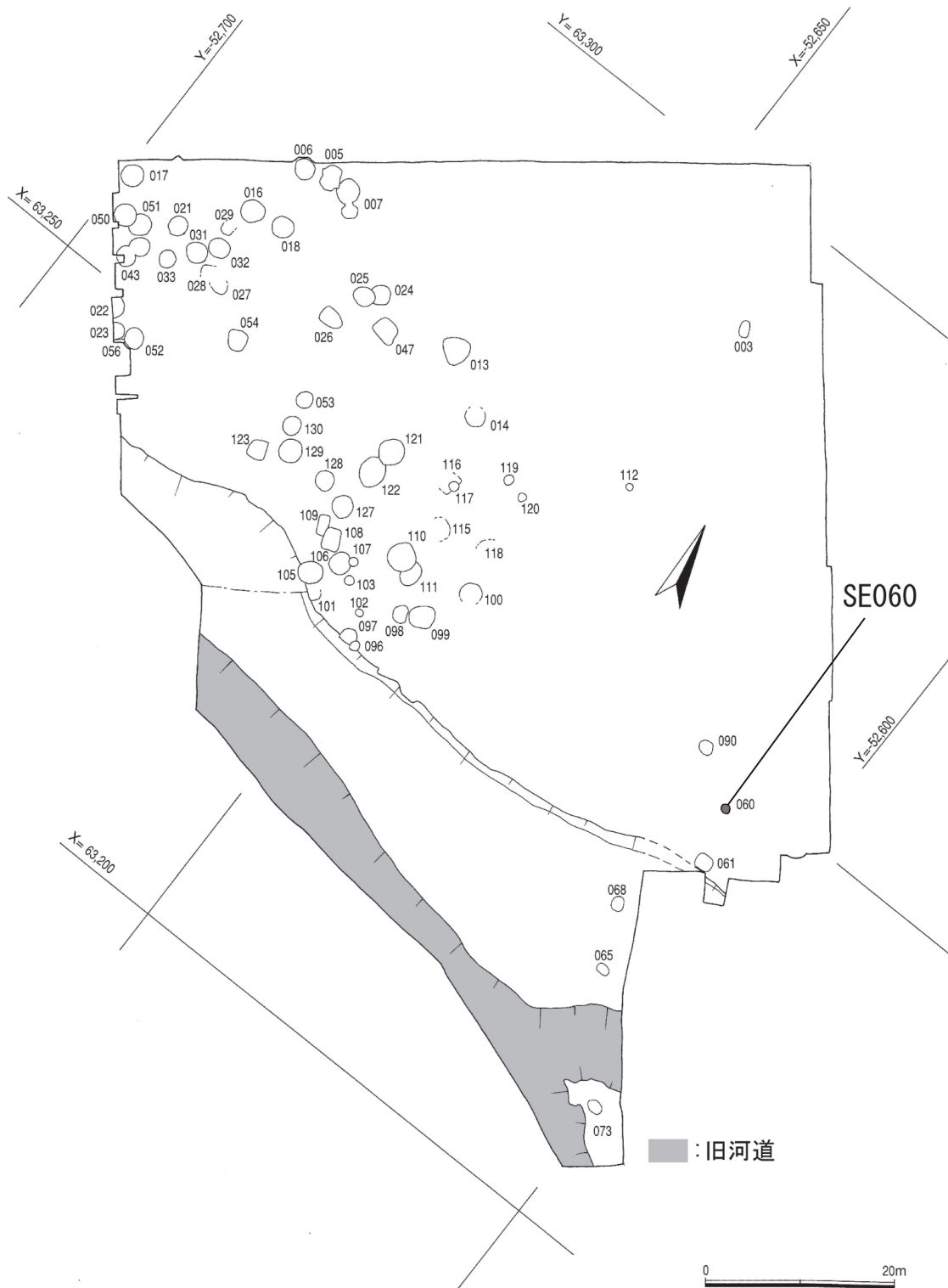


図面 2. 那珂遺跡 64 次調査位置図①

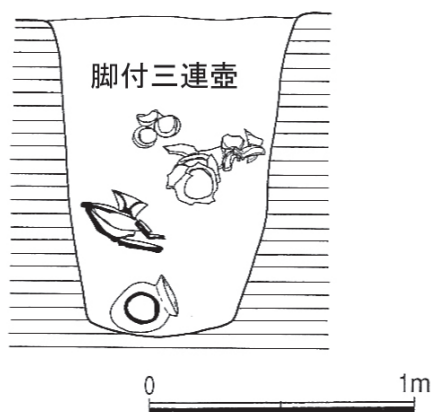
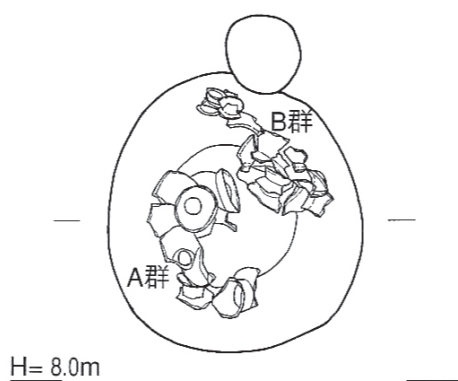


図面 3. 那珂遺跡 64 次調査区位置図②

※図面 1、2 は特別展「新・奴国展」実行委員会 2015 より改変転載



図面 4. 那珂遺跡 64 次調査井戸・貯蔵穴配置図（福岡市教育委員会 2000 より改変転載）



図面 5. 井戸（SE060）脚付三連壺」出土状況

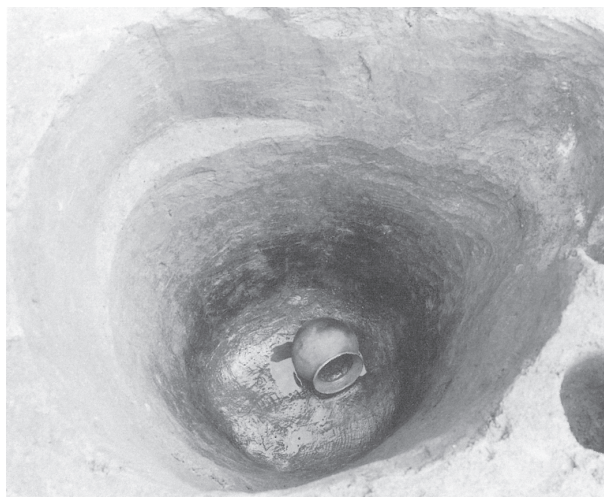
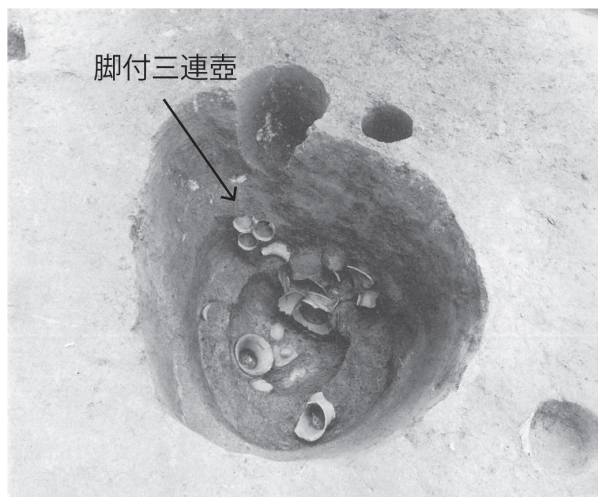


写真 1. 井戸（SE060）遺物出土状況

2. SE060（井戸）について

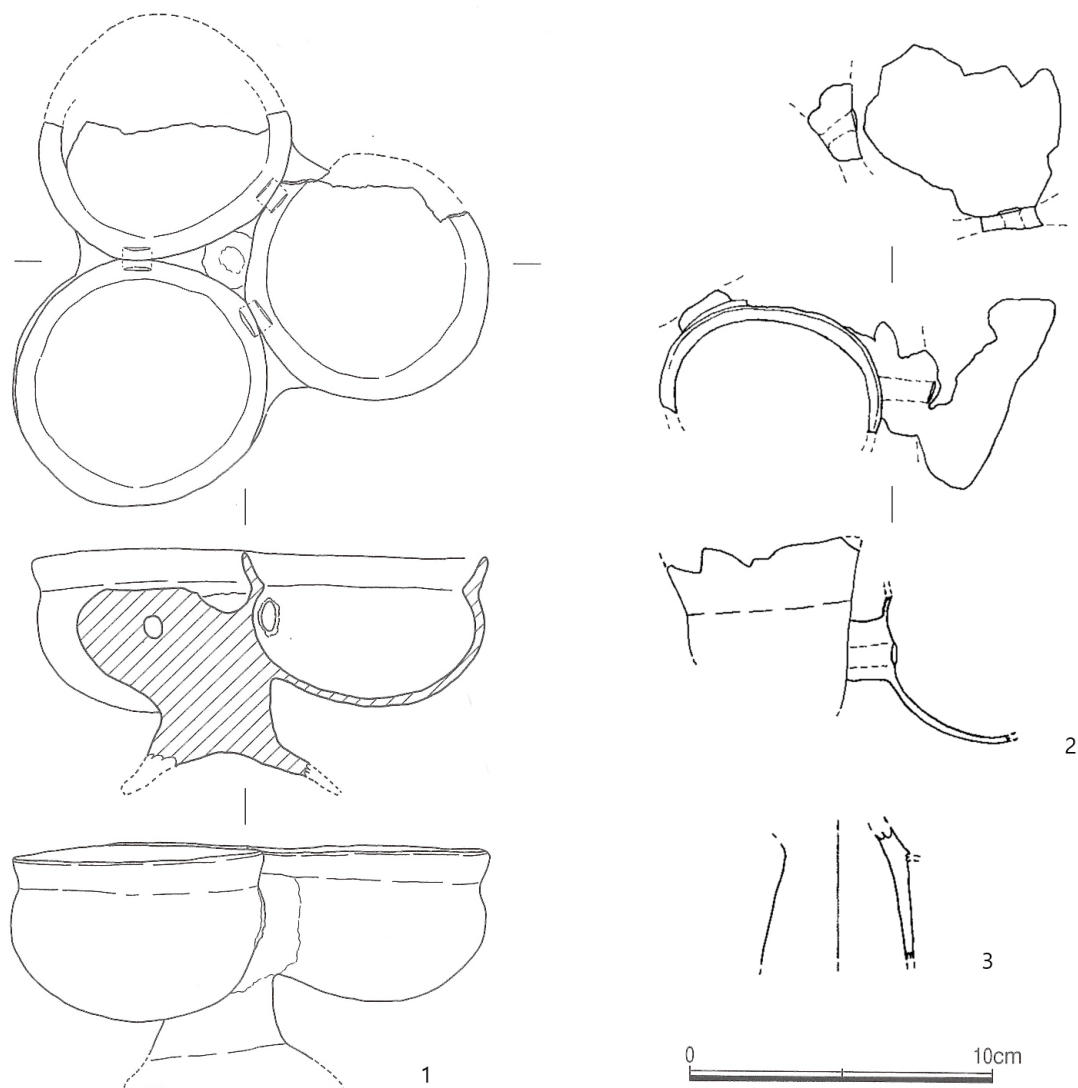
以下、報告書の記載を要約する。

平面形は直径約 1 m の円形で、検出面から床面までの深さは 1.1 m である（図面 5）。埋土は 2 層に分けられ、検出面から 80 cm までは暗褐色土、それ以下はやや砂質を帯びた灰褐色土である。底面に完形の庄内甕が横置きされ、底面からやや離れて壺 4 点からなる土器群（A 群）が、またその上に甕 6 点からなる土器群（B 群）が検出され、「脚付三連壺」はその上の壁面近くから検出されている（図

面 4)。報告書には土層図が掲載されていないため埋没の過程についての検証は難しいが、A 群と B 群のあり方は「器種ごとに分けて投棄している」ものと評価されている（福岡市教育委員会 2000）。

3. 「脚付三連壺」について

「脚付三連壺」は、「精製された小型壺（小型丸底壺；執筆者加筆）3 個体を三角形に配置し壺間を精製粘土で充填接合し、中央部に別作りの短脚を接合したものである。各壺が接する部分では胴部の最大径の位置計 3 箇所穿孔が行われる」（福岡市教育委員会 2000 p. 33 1. 32-36）。以下は執筆者の所見である。小型丸底壺の法量について、3 つのうち最も残存状態の良いものを報告書の図面上で計測すると、器高 5.3 cm、口径 8.3 cm、胴部最大径 8.3 cm である。残存高は 7.2 cm で、脚部を含めた全体の器高は 8 cm 程度に復元されている。また、3 個体を連結した全体の最大幅は、小型丸底壺 2 個体分の口径と同じとなり、16 cm 程度である（図面 6）。小型丸底壺どうしはきめの細かい粘土によって結合部分をしっかりと覆うようになされており、隙間は見られない（写真 6）。また、実測図上で計測すると孔の径は 0.7 cm 程度である。



図面 6. 那珂遺跡出土脚付三連壺（1：64 次調査、2～3：188 次調査）

日本列島において現在報告されているのは第 180 次調査（福岡市博物館 2022）を含めた 3 例（あるいは 2 例）のみであり、久住猛雄氏（註 1）の編年によるとⅡ A 期（3 世期第 3 四半期）の遺物である（久住 2021）。脚部は中実である。また坏部の中央にくぼみが見られるが、これは本来高坏の坏部中央を粘土で充填する箇所であると考えられる。連結された 3 つの小型丸底壺の中には、おそらく液体が入れられたと考えられるが、この液体が 3 つの孔により循環するところに、何らかの儀礼的な意味合いがあったのではないかと推測される。



Ⅲ・韓国釜山老圃洞遺跡出土「脚付三連壺」

1. 釜山老圃洞遺跡

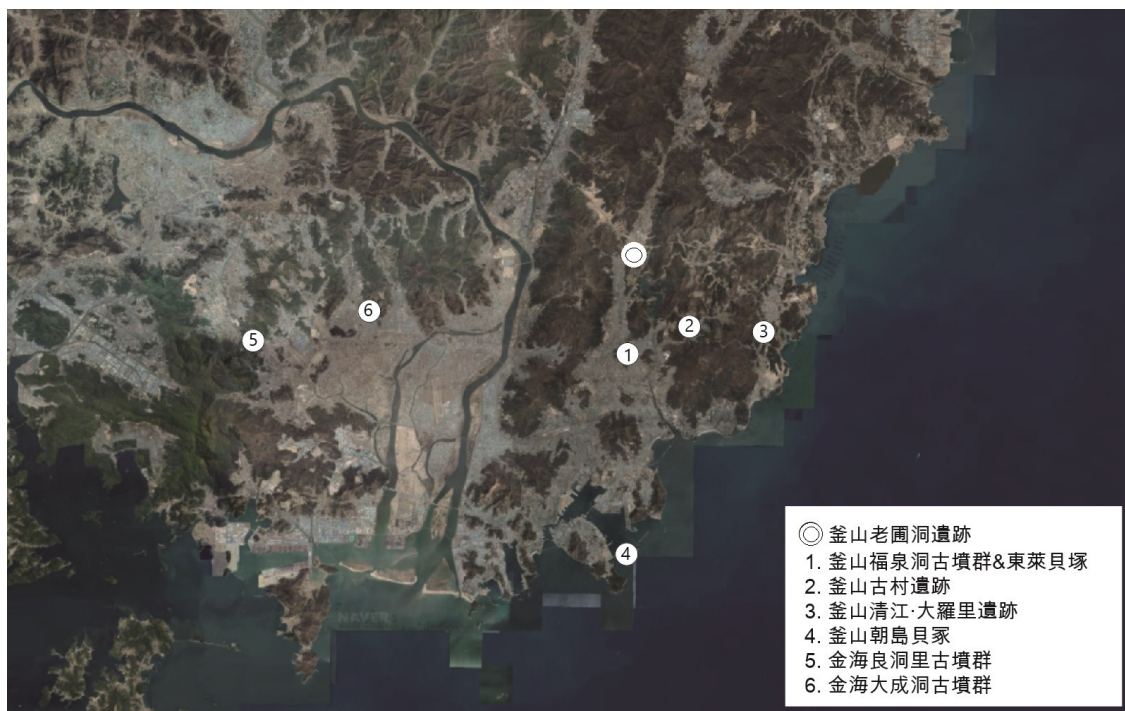
老圃洞遺跡は釜山を北から南に貫流する水営江の西側に隣接した低い丘陵地と周辺末端部に形成された釜山の代表的な原三国時代の遺跡である（図面 7）。釜山地域の古代国家の発生と展開過程を明らかにする主要遺跡と評価され、1996 年釜山広域市記念物に指定された。

写真 2. 那珂遺跡 64 次出土脚付三連壺

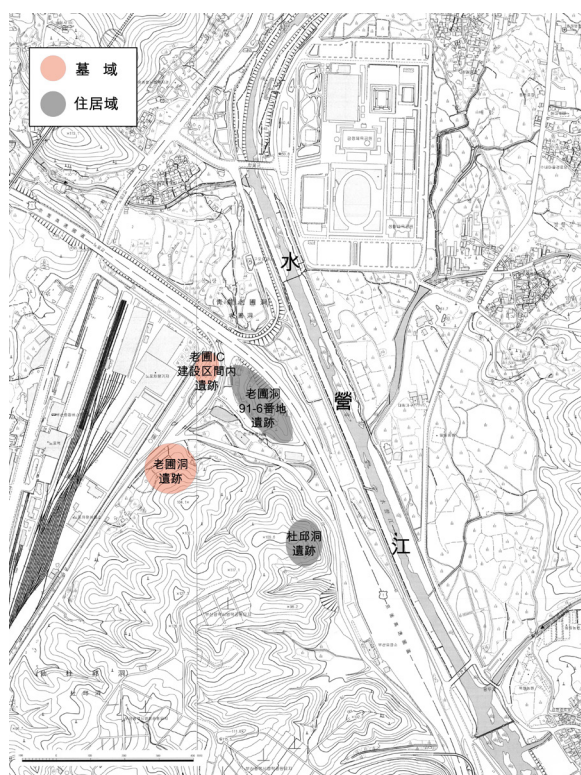
遺跡は 1983 年、原三国時代後期瓦質土器である両耳附壺と炉形土器が発見され学会に知られた。その後、発掘調査を通じて青銅器時代の住居址と墳墓、原三国時代の木棺墓・木槨墓などの墳墓 70 基余りと竪穴住居址、高床式建物址などが確認された。この他にも三国～朝鮮時代の墳墓および土坑などが調査され、長い間集落と墓域が造成された場所である。現在までの調査内容から見て、原三国時代には丘陵地の北西斜面を中心に墓域が、水営江が眺められる丘陵の東側一帯に集落遺跡が位置していたものと見られる（図面 8）。

老圃洞遺跡から確認された原三国時代の墳墓は、後期の墓制である木槨墓が中心となっている。墓坑の長さが 450 cm 以上の大型墓も一部確認されるが、長さ 250 ～ 350 cm、幅 130 ～ 230 cm 規模の中・小型墓が大部分である。遺物は炉形土器・脚付広口壺など後期瓦質土器文化を代表する器種および環頭太刀・鉄矛・鉄鏃などの武器類と鉄斧・鉄鎌などの農耕具類、水晶製切子玉などが出土した。木槨墓の編年は大きく 4 段階に分けられる（図面 10）。2 世紀後半から築造され始める木槨墓は丘陵の下から徐々に上に上がり、造成される傾向がある。

集落遺跡は墓域が造成された丘陵から約 300 m 離れた老圃洞 91-6 番地遺跡から 2 世紀中頃～3 世紀代の住居址 33 棟が調査された。墓域から南東側に約 400 m 離れたところに 3 ～ 4 世紀代に造成された竪穴住居址 17 棟、高床式建物址 9 基が検出された。住居址は平面円形と隅丸方形に区分され、



図面 7. 釜山老圃洞遺跡（◎）および釜山・金海地域の主要遺跡位置図



図面 8. 老圃洞遺跡の墓域と住居域

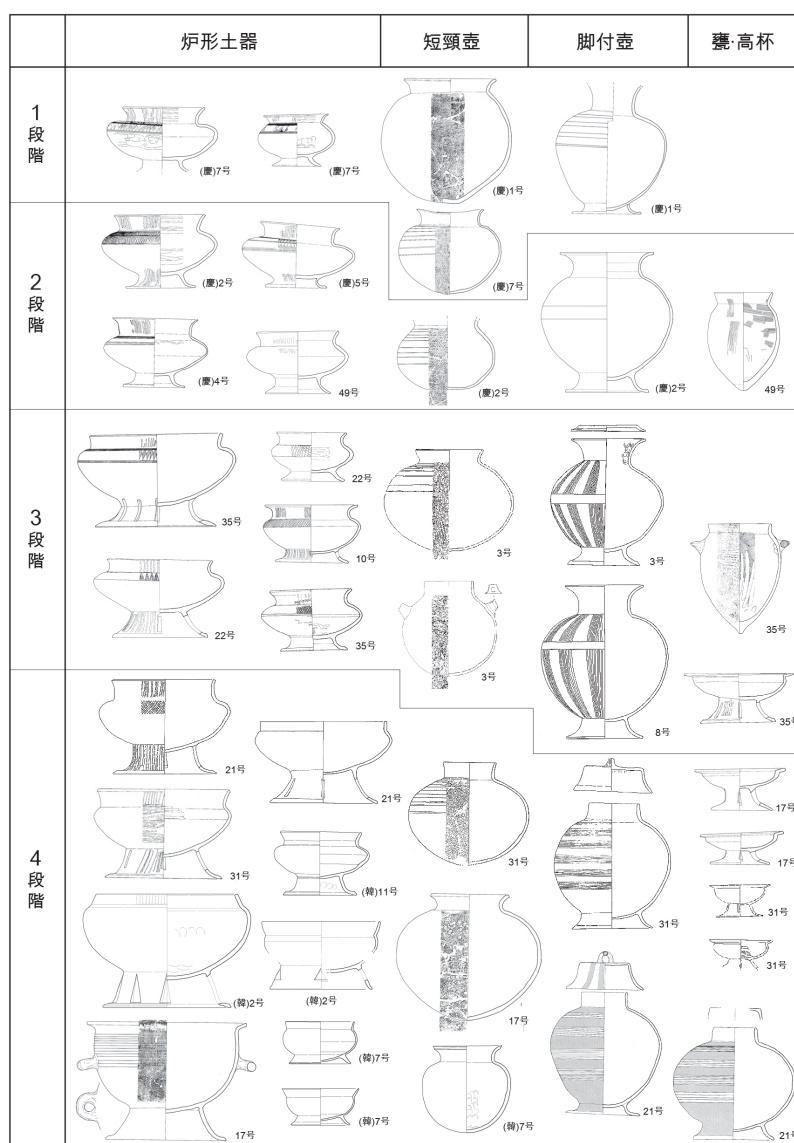


図面 9. 老圃洞遺跡木槨墓配置図

長軸長さ 400 ～ 700 cm以内に属するのが大部分である。一部住居址で炉跡が確認され、壁柱＋外柱式の主穴配置が特徴的である。

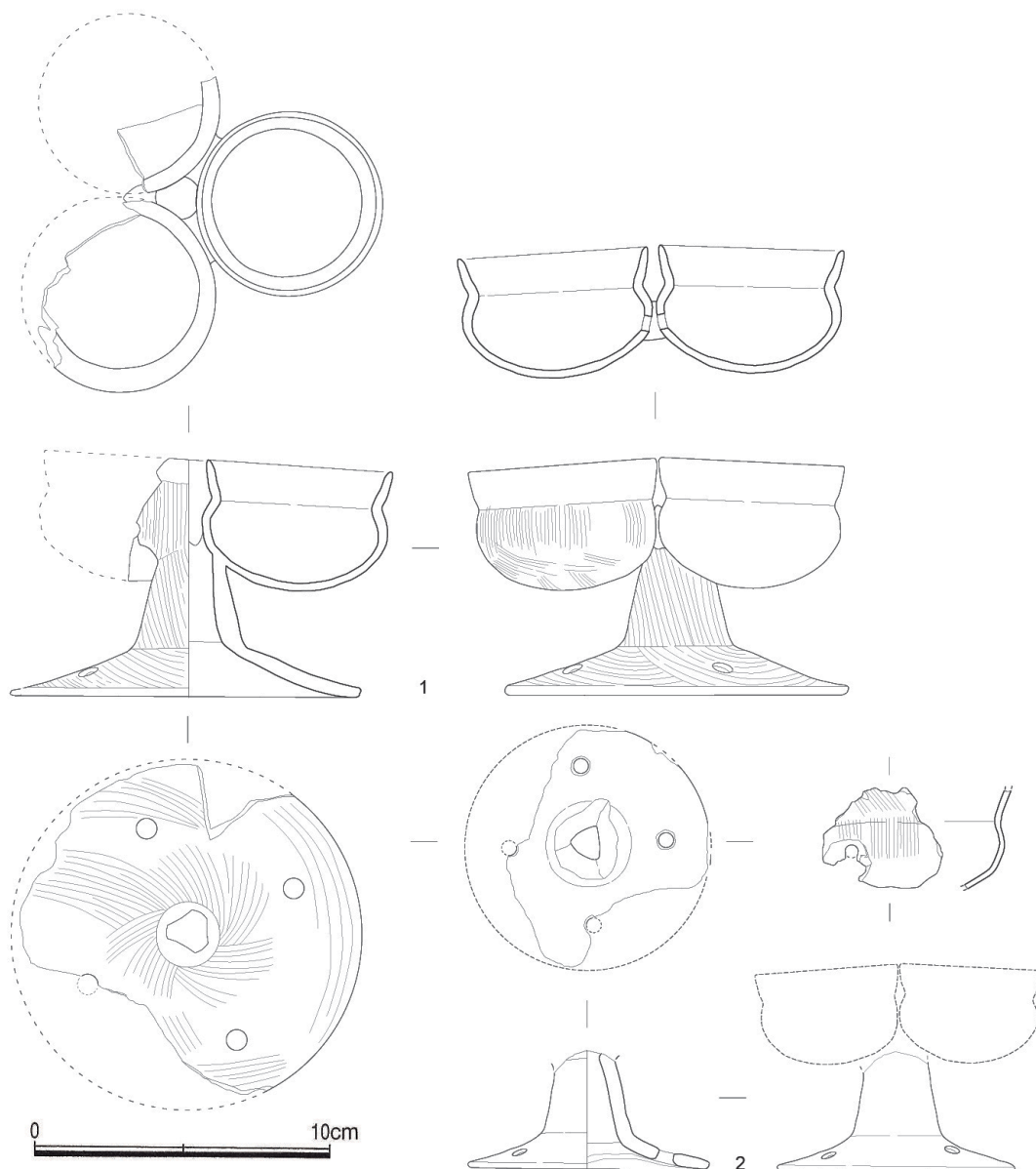
2. 老圃洞（韓）（註 2）3 号木槨墓出土「脚付三連壺」

2021 年、韓国文物研究院は 1980 年代の発掘調査区域の南側斜面上部に隣接する区域を発掘調査し、原三国時代の木槨墓 13 基と土坑 3 基などを確認した。木槨墓からは、炉形土器、脚付直口壺などの後期瓦質土器とともに、環頭刀子、鉄鏃などの武器類、水晶切子玉など、以前の調査と類似した遺物が出土した。このうち調査区域内の丘陵上位から確認された 3 号墓から、1 つの円筒形の短脚に三角形に配置された 3 個の広口小壺が付着した異形土器 2 点が出土した。



※(慶): 老圃洞遺跡, (韓): 韓国文物研究院の調査区域, その他は釜山博物館・釜山大学校博物館の調査区域

図面 10. 老圃洞遺跡編年案（釜山博物館，釜山老圃洞遺跡Ⅲ，2019，図面 .34 改変転載）



図面 11. 老圃洞（韓）3号木槨墓出土脚付三連壺

この異形土器は一つの脚台に数点の小皿または円筒形の器が付いているという点で灯台形土器と類似している。灯台形土器は小皿の下に小さな穴をあけ、円筒形の管で垂直方向に連結している。これに対し、老圃洞（韓）3号出土品は、透孔が床ではなく胴部最大径に位置し、接続した小壺を貫通するという点で違いがあり、器形の特徴を盛り込んで「脚付三連壺」と呼ぶことにする。

図面 11-1（写真 3）は木槨内の北側の底から出土した。坏部を成す 3 個の小壺のうち 1 個だけが完形に近く、その他 2 個はそれぞれ 1/3、3/4 程度欠損する。小壺の大きさは高さ 4.1 cm、口径 6.0 cm、胴部最大径 6.1 cm で口径と胴部最大径がほぼ同じである。脚部の復元径は 11.8 cm、全体器高は 7.8 cm である。小壺は丸底で緩やかに上がってきて少し締め、口縁部は弱く内湾する。3 個の小壺を△状に配置し、胴部中下位を脚部上段に乗せた後、それぞれの小壺の間および小壺と脚部の間を少量の粘土を充填して接合する。小壺関節する部分に直径 0.5 cm の円形透孔を開ける。脚部は中央が空いた中空型であり、下がりながらやや広がってラップ状に大きく広がる。脚部下段には直径 0.7 cm



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

写真 3. 老圃洞（韓）3号木槨墓出土土脚付三連壺

の円形透孔が等間隔で4組配置される。小壺の口縁部の外面はナデ、内面は横方向のハケメ調整である。胴部の外面はハケメであるが、中位以上は縦方向、底部を含む中位以下は整然としない。胴部の内面はナデで、脚部外面はハケメ調整である。

図面 11-2 (写真 4) は木槨内部の陥没土から出土し、残存状態が良好ではない。特に小壺は口縁と胴部のごく一部だけが残存するが、脚部上段に残った小壺との接合痕から見て、3 個の小壺を付着したものと推定される。この遺物も透孔が確認されるが小壺外面の透孔部周辺に少量の粘土痕が残っており、小壺と小壺を接合する時に少量の粘土を充填したものと見られる。脚部にも小壺と小壺の間を埋めた三角状の粘土の一部が残っている。小壺の口縁部の外面は斜方向のハケメ調整痕が、胴部上位には縦方向のハケメ調整痕が確認される。図面 11-1 とは異なり、脚部では明確なハケメ調整痕が観察されない。



①



②

写真 4. 老圃洞（韓）3 号木槨墓出土脚付三連壺②

これらの土器が出土した 3 号木槨墓は、後に築造された 2 号木槨墓により遺構の半分以上が破壊され、細密な編年が困難な鉄製刀子と鉄鏃、鑄造鉄斧だけが出土した。2 号木槨墓は出土している炉形土器の半楕円形の胴部、短く内径する口縁部、三角形の透窓、脚端部の突帯などの要素から見て 3 世紀後半に編年される老圃洞遺跡の「木槨墓Ⅳ段階」に該当する（図面 10）。したがって、3 号木槨墓はこれより前の段階か、同段階の早い時期と見ることができる。

前述のように、老圃洞出土の「脚付三連壺」と類似したものは福岡市那珂遺跡から出土している。現在確認された遺物の数量は両国とも 2 点で同じだが、以前の時期まで韓半島で確認されていない広口小壺に脚部を付着させたという点、そして主な器面調整がハケメ調整がある点から見て、日本列島から搬入された土器と判断される。

Ⅳ．那珂遺跡群 64 次調査と老圃洞遺跡 6 次調査出土資料の相違点について(註 3)

これまで詳細に記載した那珂遺跡群例と老圃洞遺跡例の類似点と相違点から、老圃洞遺跡例がどのようなものであるのかについて論じる。そして、その見通しをⅤ章で老圃洞遺跡例の意義を論じる際の前提条件として位置づけたい。

類似点および相違点は、次の表の通りにまとめられる（表1）。

①法量；老圃洞遺跡例の方が、小型丸底壺一つ一つがやや小ぶりで、最大幅は4 cm程度異なる。器高の差は小さいものと推測される。このことから、法量について、見た目には著しい差異はない。（見た目の模倣）

②器面調整；那珂遺跡群例では器面の風化が進み、器面調整を明らかにすることはできなかった。しかしながら、ハケメが完全に視認不能となるような強烈な風化が起こったようには見られないことから、もともとはナデ、あるいはミガキであったろうと予想される。これに対して老圃洞遺跡例では、器面はハケメ調整である。これにより、老圃洞遺跡例がより粗雑な印象を受ける。（倭系土器の器面調整）

③脚部の製作技法；那珂遺跡群例は、中実の脚部であり中央が窪み、粘土を充填して坏部を作り上げる脚を土台とする。これに対して老圃洞遺跡例では、中空で円筒型を呈し、別作りの坏部を乗せる脚部を土台とする。また全体の形状はラッパ状である。このことから那珂遺跡群はB系統（近畿第Ⅴ様式）、老圃洞遺跡例はA系統（九州在地土器文化）（壇 2011）であると判断される（註4）。（土器製作技法＝系統の違い）

表 1. 那珂遺跡群例と老圃洞遺跡例の違い

		那珂遺跡群例	老圃洞遺跡例
①法量	小壺器高	5.3	4.1
	口径	8.3	6
	胴部最大径	8.3	6.1
	全体器高	(8)	7.8
	復元底部径	－	(11.8)
	最大幅	16.6	12.2
②器面調整	口縁部(外面)	ヨコナデか	ナデか
	口縁部(内面)	不明	ハケメ
	胴部(外面)	不明	ハケメ
	胴部(内面)	不明	ナデか
	脚部 内面・外面	不明	ハケメ
③脚部の技法	脚部特徴1	中実	中空
	脚部特徴2	中央が凹む	円筒状
	形状	やや短く開く？	ラッパ状
④接合部分	孔径	0.7	0.5
	接合粘土	多	少
	隙間	無	有
	系統	B系統	A系統

④接合部分；老圃洞遺跡例の孔径是那珂遺跡群例に比べてやや小さい。少量の粘土で接合し、その後穿孔を行っている（写真3-⑥，4-①）。その結果、乾燥から焼成までの過程において、収縮により隙間が生じたものとみられ、おそらく3つの小型丸底壺に注いだ液体を循環させる機能は持っていなかったものと考えられる。脚付三連壺にとって本来はこうした機能が重要であったことは、那珂遺跡例の連結部分において、粘土による接合が非常に入念に行われていることからわかる（写真2-③）。また実見していないため不確かではあるが、那珂遺跡群第180次調査の事例においても、粘土を用いて連結部分が丁寧に作出されており、このことから、老圃洞遺跡例においては、小型丸底壺の連結が強く意識されていないものと判断される（図面6-2）。（機能の消失）

以上の所見から、老圃洞遺跡例について次のような性格のものであると判断される。

A：那珂遺跡群例の模倣品である（①，②，③，④）。

B：倭人との交流を表わす効果を持った道具である（①，②，④）。

脚付三連壺が本来倭人社会の中で持った機能は、老圃洞遺跡3号木槨墓の被葬者あるいはその葬送儀礼を行った集団にとって重要ではなく（④）、器形や器面調整、小型丸底壺を三つ連結する（①，②）、というような倭人との交流が視覚的にうかがえる効果を持った道具を葬送儀礼に用いることが重要であったものと思われる。

V. 釜山老圃洞遺跡出土の「脚付三連壺」から見た日韓交流

1. 釜山地域から出土の倭系遺物から見た日韓交流

前述したように、釜山老圃洞（韓）3号の木槨墓から出土した脚付三連壺は、日本列島から搬入された土師器で、福岡市那珂遺跡出土品の模倣品と推定される。器形および日本からの出土の様相から、飲食物の調理・保存のために使用した生活容器ではなく、儀礼のために使用した特殊な器種である。韓半島では見られない非常に独特な器形であり、倭との交流を効果的に示すだけではなく、倭人社会の「儀礼」と関連した器物を共有することで被葬者（あるいは老圃洞集団）が倭人社会と密接な関係にあったことを表現した可能性を示唆する。さらに、このような遺物を一人の墓に2点も副葬したという点も、当時の対倭交流が重要な社会的成長基盤であったことを示している。

一方、釜山地域では脚付三連壺が副葬される3世紀中後半から4世紀代まで倭系遺物が多数出土する。特に土師器系土器は老圃洞遺跡の他にも東萊貝塚と楽民洞遺跡、福泉洞古墳群、華明洞古墳群、清江・大羅里遺跡、古村遺跡、朝島貝塚など釜山各地で確認されている。これと共に、当時の釜山地域の中心集団の墓域といえる福泉洞古墳群では、土師器系土器をはじめ、筒型銅器、翡翠玉、鉄槍など多様な倭系遺物の副葬が連続的に行われ、この時期の釜山地域と日本列島間の交流が活発だったことが推測される。

土師器系土器をはじめとする様々な倭系遺物を持って韓半島に来た倭人の最大の目的は鉄資源の確



図面 12. 釜山地域出土の3～4世紀代倭系遺物

保と関連があると指摘されてきた。釜山地域で鉄を製錬して鉄素材を直接生産したかについてはまだ確認されていないが（註5）、3世紀後半に編年される福泉洞80号墓に鉄素材である鉄鋌が副葬された後、連続的に複数副葬されるだけでなく、以後副葬される甲冑・馬具・武器など多様な鉄製品の水準と副葬量は嶺南地方でも上げられる。特に筒形銅器、翡翠製勾玉、鉄槍など多様な種類の倭系遺物が副葬された福泉洞38号墓には鉄鋌20枚、鉄鏃383点、鉄矛17点、縦長板甲冑、札甲など鉄器類の副葬量が相当な数に上るという点もやはり「鉄」を媒介とした対倭交流が円滑だったことを示している。このように海と隣接し、鉄を安定的に確保することができた釜山福泉洞勢力は金海大成洞勢力を経由せず、独自の対倭交渉をリードできる環境を十分に整えたといえる（註6）。

釜山地域では山陰系、北部九州系、北陸系、吉備系など多様な系統の土師器系土器が出土している。これらの多様な系統の土師器系土器が日本列島各地から直接流入したのか、あるいは北部九州を経て流入したのかについてはまだ判断がつかない。しかし、日本列島内でも一つの地域ではなく、各系統と関連した地域（あるいは国）が対倭交渉に積極的に参加したことを示唆するものと見られる。激変する国際情勢の中で、やはり日本列島においても、各地域（あるいは国）ごとに単一化された対外交渉窓口を運営するよりも、多元的ルートを用意しようと努力したのだろう。

2. 原の辻遺跡との関連における位置づけとその意義

本稿で扱った脚付三連壺は、久住氏の研究によりⅡA期（3世紀第3四半期）のものであるとされている（久住2017）。これが原の辻遺跡の展開の中で、どのように位置付けられるか以下に概観し、この遺物についての一つの解釈を提示する。

韓半島や中国との交流の窓口であった壱岐の原の辻遺跡の変遷は、遺構の密度や規模、弥生文化の遺物のみならず韓半島系、楽浪系遺物の出土量の変化によって、Ⅰ～Ⅵ期の6つに時期区分されている（長崎県教育委員会2005）。このうち、Ⅵ期は「衰退期」とされ、その期間は、3世紀第3四半期～4世紀末葉頃（久住氏のⅡA期～ⅢA期新相）のおおよそ150年ぐらいと考えられている。

この「衰退期」の直前（久住氏のⅠB期：3世紀初頭～前半）には、九州本土の博多湾岸へ、対外交渉の場としての重要性が移行し、「博多湾貿易」が成立したと考えられており、それまで対外交渉に大きな力を持った「伊都国」が急激に衰えた時期と考えられている（久住2007b）。原の辻遺跡の「衰退期」はこれと連動しているのである。

さて、老圃洞遺跡出土の脚付三連壺は「博多湾貿易」が盛んとなるⅡA期に、「奴国」の脚付三連壺を模倣して作られたものと考えられる。

韓半島の対倭交渉の中心である金海大成洞勢力との交渉が「奴国」の地域に移行したこの時期に、福泉洞勢力が独自の対倭交渉の相手を模索するとしたら、衰退期の「伊都国」がこうした相手としてふさわしく、また「伊都国」も新たな交渉相手を模索していた可能性が考えられる。よって、次のような解釈が可能である。

「老圃洞遺跡3号木槨墓に副葬された脚付三連壺は、「伊都国」に関連する勢力によって模倣され、新たな対倭交渉の相手を求める「福泉洞勢力」に倭との交渉を表わす器物としてもたらされた。そして、こうした交渉を担った人物の墓に副葬されたものである。」

「模倣」や、「奴国」と「伊都国」の関係、それぞれを個別の勢力と見るかどうか等の議論はあるものとするが、一つの解釈として提示したい。

このように、老圃洞遺跡出土の「脚付三連壺」の意義は、倭国と伽耶の交流のあり方を、より具体的に解明する重要な手掛かりになることである。

VI. 終わりに

以上、本稿では釜山老圃洞遺跡から出土した脚付三連壺を観察し、土師器系土器であることを明らかにし、日本の奴国の中枢集落であり交易センターでもあった福岡市那珂遺跡から出土した脚付三連壺との比較検討を通じて、これを模倣したものが釜山老圃洞に搬入されたものと理解した。また、当時の韓半島と日本列島間の交渉の中心は金海大成洞と北部九州の奴国であったが、老圃洞出土品が奴国事例の模倣であることに注目し、釜山地域と伊都国間の交渉を通じて釜山老圃洞に流入した可能性を提起した。

今回の共同研究では、釜山地域から出土した土師器系土器および日本国内の土師器の地域差に対する検討が十分ではないかもしれないが、既存の金官伽耶 - 北九州 / 畿内などと言及された日韓交流の様相を、より大胆な細分地域（あるいは国）間の交流として理解しようと試みたという点に意義を置こうと思う。

韓半島から出土した土師器系土器は、当時の日韓交流の様相を明らかにする上で非常に重要な資料である。特に釜山地域は多種多様な土師器系土器が継続的に出土し、韓半島内の土師器系土器の変遷を見ることができる場所である。今後、より綿密な遺物観察と資料調査を実施し、日韓交流の具体的な様相を明らかにできる議論を進めていきたい。

註

1) 久住猛雄氏のご教示による。資料の閲覧についての相談や、脚付三連壺の模倣についてアドバイスをいただいた。記して感謝いたします。

2) 老圃洞遺跡はこれまでに、釜山博物館、釜山大学校博物館、韓国文化財研究院によって調査されている。「老圃洞遺跡（韓）」は、韓国文物研究院による調査を現す。

3) 以下、那珂遺跡群例、老圃洞遺跡例と呼ぶ。

4) 弥生時代終末期（3世紀中頃）から古墳時代中期（5世紀頃）までの土師器の変化は、久住猛雄氏の一連の研究（久住 1988 他）により、A 系統（九州在来系土器群）、B 系統（近畿第Ⅴ様式系土器群）、C 系統（庄内式系土器群）、D 系統（布留式系土器群）、E 系統（山陰系土器群）の 5 つの土器群に分けられ、それぞれの変化や地域間の影響関係を明らかにすることによって、古墳時代研究が深化してきている（久住 2017）。この系統については、壇佳克氏によって簡潔にまとめられており（壇 2011）、本文で検討した脚付三連壺の脚部は、高坏の脚部の系統を参考にした。

5) 3～4 世紀に編年される楽民洞貝塚と楽民洞 53-7 番地遺跡で精錬と鍛冶工程と関連した製鉄爐と送風管片、鉄滓、炉壁片など製鉄関連遺物が確認された。

6) 4 世紀、金海大成洞古墳群に副葬された倭系遺物の質および数量から見て、韓半島の中心が大成洞勢力である。

参考文献

1. 韓国語文献

- 東亞細亞文化財研究院, 『釜山古村里生産遺跡』, 2010.
박정옥, 「삼한시대 노포동 유적」, 『변한, 그 시대의 부산을 담다』, 복천박물관 특별전 도록, 2020.
부산광역시립박물관 복천분관, 『釜山の 三韓時代 遺蹟과 遺物 I』, 1998.
부산박물관, 『釜山 老圃洞遺跡 III』, 2019.
井上主税, 『嶺南地方 출토 倭系遺物로 본 한일교섭』, 경북대학교 문학박사학위논문, 2006.
조성원, 「영남지역 출토 4~5 세기대 토師器系土器의 재검토」, 『韓國考古學報』 99 집, 한국고고학회, 2016.
한국문화연구원, 『부산 노포동유적VI』, 2023.

2. 日本語文献

- 久住猛雄 1998 「北部九州における庄内併行期の土器様相」 『庄内式土器研究XⅧ-庄内併行期の土器生産とその動き-庄内式土器研究会
2007a 「比恵・那珂遺跡群『東アジア考古学辞典』東京出版社
2007b 「博多湾貿易」の成立と解体-古墳時代初頭前後の対外交易機構-『考古学研究』第53巻4号
2017 「福岡県(糸島・早良・福岡平野)」 『九州における古式土師器 発表要旨集・基本資料集』九州前方後円墳研究会
2021 「奴国の集落・墳墓にみるその社会-弥生時代後期から古墳時代初頭を中心に-」 『二万余戸の実像奴国』糸島市伊都国博物館
高田寛太 2023 「伽耶と新羅の接境の地, 釜山」 『特別展伽耶』九州国立博物館
壇 佳克 2011 「土師器の編年①九州」 『古墳時代の考古学1 古墳時代の枠組み』同成社
趙晟元・山本孝文訳 2018 「4~5世紀における韓半島嶺南地域出土の軟質土器と土師器系土器」 『日韓交渉の考古学-古墳時代-(最終報告書 論考編)「日韓交渉の考古学-古墳時代-」研究会「日韓交渉の考古学-三国時代-」研究会
福岡市教育委員会 2000 『那珂 24- 那珂遺跡群第64次調査報告書』福岡市文化財調査報告書第638集
2022 『那珂 84- 那珂遺跡群第177・180次調査報告書』福岡市文化財調査報告書第1442集
松見裕二 2015 『海の王都・原の辻遺跡と壱岐の至宝』壱岐市教育委員会

執筆者（掲載順）

宮崎 貴夫 元長崎県埋蔵文化財センター調査課長

申 東昭 釜山博物館 学芸研究士

白石 溪冴 長崎県埋蔵文化財センター 主任文化財保護主事

長崎県埋蔵文化財センター
研究紀要第 14 号
令和 6（2024）年 3 月

編集・発行：長崎県教育庁長崎県埋蔵文化財センター
〒 811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515-1
電話 0920-45-4080 ファックス 0920-45-4082
U R L <http://www.nagasaki-maibun.jp/>

印 刷：鴻文社印刷所

